一橋大学体育会バレーボール部

第５回海外遠征（タイ）報告書【詳細版】

文責　４年　主将　平林凛太郎

２年　　多田友之介

目次

Ⅰ. 遠征内容……2

概要……3

遠征総括①……5

遠征総括②……6

遠征総括③……7

日程詳細……9

Ⅱ. 部門別報告……15

(1) 交流・討論会部門報告……16

(2) 経済部門報告……30

(3) 歴史文化部門報告……39

Ⅲ. 班別行動報告……49

Ⅳ. 全体感想……55

Ⅴ. 如水会タイ支部訪問……58

Ⅵ. 事前学習……61

Ⅶ. 参考資料……63

Ⅰ．遠征内容

～はじめに～

私たち一橋大学体育会バレーボール部は、如水会、およびOBの皆さまのお力をお借りして、2018年8月6日から8月12日までタイを訪問、チュラロンコン大学(以下ＣＵ)と交流をして参りました。バレーボール部にとって今回の海外遠征は5度目でしたが、無事成功することができました。

頂きましたご支援・ご助力に対し御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。今回の海外遠征につき以下の通りご報告申し上げます。

概要

(1)日程〈2018年8月6日～8月12日〉

8月6日　成田空港発(CI107便)・台北桃園空港経由(CI835便)・バンコク着

8月7日　日本大使館・JETROバンコク支部訪問、タイトヨタBANPHO工場見学、如水会タイ支部夕食会

8月8日　アユタヤにてワット・ヤイ・チャイモンコン/ワット・マハタート/ワット・プラ・シー・サンペート見学、アジアティーク・ザ・リバーフロント班別見学

8月9日　EMINENCE訪問、ＣＵバレーボールクラブとの交流試合・交流夕食会

8月10日　国立博物館見学、ＣＵバレーボールクラブとの交流試合・交流討論会・交流夕食会

8月11日　タリンチャン水上マーケット見学、ワット・プラケオ/ワット・ポー/ワット・アルン見学、班別自由行動

8月12日　バンコク発(CI838 便)・台北桃園空港経由(CI108便)日本へ帰国、解散

(2)参加者

体育会バレーボール部　四年生5名、三年生11名、二年生11名、一年生10名、付添OB 2名、

合計39名

氏名詳細は添付の参考資料の通り。

なお、安西正嗣OB、石川城太部長がＣＵとの交流（8月9日、10日）に現地参加。

(3)交流先

ＣＵバレーボールクラブ

(4)交流試合会場

チュラロンコン大学(254 Phayathai Rd,Khwaeng Wang Mai,Khet Pathum Wan,Krung Thep Maha Nakhon10330)

総合体育館（交流試合)、大学内食堂およびレストラン（交流夕食会)

(5)宿泊場所

チュラロンコン大学寮 Chuan Chom/Wittayanivej

住所(Chuan Chom)：254 Phayathai Rd,Khwaeng Wang Mai,Khet Pathum Wan,Krung Thep Maha Nakhon 10330

(6)その他、訪問先

日本大使館 177（Witthayu Road,Lumphini,Pathum Wan,Bangkok 10330)

JETRO バンコク事務所

タイトヨタ BANPHO 工場（99Moo2,Lad Kwang,Ban Pho,Chachoengsao 24140)

如水会バンコク支部

EMINENCE（5Soi Prachanukul 3（Rachada 66）Rachadapisek Rd.Wongsawang,Bangsue,Bangkok 10800)

遠征総括①

3 年　渡邊雄貴

今回のタイ遠征は、一橋大学バレーボール部にとって 5 回目の海外遠征である。2010 年から隔年で回を重ねてきたが、如水会および一橋大学バレーボールクラブ(OBOG 会)からのご支援を頂きながら、より充実した遠征に進化している。私たちの海外遠征の特徴を 3 点あげる。1 つ目は一から作り上げる点である。どこに行くのか、どの大学と交流するのかを決めるところから 1 年半以上かけて遠征の準備をする。2 つ目は現役が主体な点である。現役が目的を考えながら遠征先やスケジュールを希望し進めていく。海外遠征アドバイザリー委員会という、麻植茂氏・吹野博志氏をはじめとする OBOG が委員となって学生主導の海外遠征に関しその経験から有効な助言をする一橋バレーボールクラブの機関より、現役の遠征先や遠征計画に対して助言や承認を頂くことでより充実した遠征内容になる。また、より充実した海外遠征を実現するために、4 回にわたる勉強会を自主的に行った。3 つ目は、現地大学生との交流でバレーボールの試合をするだけでなく、英語での討論会や夕食会を通じて相互理解を深めている点である。他国の学生との交流において英語での討論をすることにより、相互理解が深まると同時に、国際的な視点で物事を考える機会となる。

次に現役が主体的に行った勉強会について説明する。今回のタイ遠征では、「将来にわたるフレンドシップ」「経済発展のダイナミズム」「ユニークな歴史文化」の 3 つをテーマに設定し、このテーマの学習を深めるために勉強会を開催した。それぞれのテーマに合わせて討論会班、経済発展研究班、歴史文化研究班の 3 班を作り、全員がいずれかの班に所属して事前学習を進めた。遠征直前期(2018 年 6 月~7 月)には、毎週末に 2 時間程度の勉強会を行い、各班で学習した知識を部員全体で共有した。この勉強会を行ったことにより、実際の交流や見学において事前の知識と照らし合わせた深い学習をすることができた。具体的には、討論班主体に行った討論会練習によって一橋側が討論会をリードして円滑な話し合いをすることができた。経済発展研究班のプレゼンテーションにより、日本大使館や JETRO バンコク事務所での中進国に関する質問や各訪問企業での英語での積極的な質問をすることができた。歴史文化研究班のプレゼンテーションにより、国立博物館や水上交通、アユタヤの歴史や各寺院の価値を理解したうえで見学をすることができた。

事前準備に関して述べてきたが、今回の遠征で一番印象に残っているのはチュラロンコン大学との交流である。2 日間にわたり試合・討論会・懇親会を通して交流を深めたが、両校ともに積極的に話をする姿勢が見られた。特に討論会では、性の多様性という難しいトピックでありながらも、オープンな議論をすることができたことは大きな収穫であった。両校から再度交流したいという意見もあり、「将来にわたるフレンドシップ」を作ることができたチュラロンコン大学との交流は成功であった。

今回のタイ遠征は事前準備から力を入れたことで、現地で多くのことを学び経験するこ

とができた遠征だった。本遠征に対しご支援をいただいた如水会やOBOG会に感謝の意を表するとともに、各部員がこの経験を活かし社会で活躍することで貢献していきたい。

遠征総括②

3年　吉田陽

今回の遠征では、テーマの一つに「経済発展のダイナミズム」を感じ取ることを掲げていた。その一環として2日目に日本大使館、JETROバンコク事務所、タイトヨタBAMPHO工場の訪問、そして如水会バンコク支部にて我が校のOBで、現在タイにてご活躍されている方々と夕食を供にした。また、4日目には現地企業であるEMINENCE社に訪問した。それらについて特に印象に残った日本大使館の訪問を中心に以下に記そうと思う。

日本大使館では、我が校のOBで、現在広報文化部で活躍されている久芳さんからお話をお伺いした。内容についてはまずタイ王国の概要や政治・経済情勢などについて聞いた後、具体的な大使館の業務内容、その後に質疑応答となった。その中で特に興味を持ったのがタイの現在の課題についての話だ。タイは現在「中進国のワナ」にはまっている。これまでは安い労働力を武器に外国資本を集積できていたが、経済発展とともに賃金が上昇し、うまくいかなくなってきた。その解決策の一つとして産業人材の育成を掲げており、日本の教育制度の導入なども行っていと聞いた。また久芳さんを含めた広報文化部もタイの優秀な学生を日本に招くなど、この取り組みに少なからず関与しているそうだ。人口が少ないタイがそのハンデを乗り越え、今後どのように発展していくのだろうか。

JETROバンコク事務所ではSouknilanh Keolaさんからタイとラオスの中進国経済についてのお話をお伺いした。ASEANでは現在「中進国のワナ」の観点から3つのカテゴリーに分類され、「縁がない」シンガポールやブルネイ、「突破できない」マレーシアなど、そして後発ASEANであるそのほかのまだ低所得の国々に分類される。その中でタイとラオスは両国とも外国からの投資・進出に依存しながらも経済状況が異なり、ラオスでは人が集まらず労働力を含めて外国に頼っていることを学び、大変興味深かった。

その後、バスで一時間ほど移動しタイトヨタBAMPHO工場を訪問した。そこは広大な土地を利用した大規模な工場であり、その工場の説明と生産ラインのツアー見学を英語でしていただいた。生産ラインでは4色に分けられたランプの使用や何回も繰り返し行われる検査工程によって車体の安全性を担保しようとする仕組みを勉強することができた。トヨタ生産方式を間近で勉強することができ、とても有意義な見学となった。

如水会バンコク支部の夕食会では、20名を超える多くのOBと交流することができた。10年以上タイにて活躍されている方から今年赴任した方やこの夏からタマサート大学にて勉

強する学生まで様々な方と食事とともにお話をお伺いした。これだけ多くのOBが活躍している点からも日本産業のタイへの進出の一側面を垣間見ることができたと思う。

EMINENCE社では社長のArinさんを中心に多くの社員さんやArinさん一家に温かく迎えていただいた。紙面の都合上、詳細は割愛させていただきます。

今回の訪問を契機として今後一層タイ経済についての勉強を進めていきたいと思う。そして、後輩たちには今回の遠征の成果を更に一層レベルアップしていってほしい。

遠征総括③

3年　　旭麻衣

現役の海外遠征担当とOBから構成される海外遠征アドバイザリー委員会との打ち合わせの末に訪問先がタイに決定してから、私を中心に訪問先の交流校の選定の作業に入った。今までの遠征では、2年前の台湾遠征では国立台湾大学、4年前のシンガポール遠征ではシンガポール国立大学、といったその国のトップの大学を訪問してきた。そのため、まずタイ国内でそのような地位にあるチュラロンコン大学のバレーボール部にアプローチすることにした。また、バンコク市内に一橋大学のように社会科学の学部のみに特化したタマサート大学もあり、そこに弊部のOBが以前留学していたという縁もあってチュラロンコン大学と平行してアプローチすることにした。当初、チュラロンコン大学とは何もコネクションがなく、フェイスブックなどのSNSを通じてコンタクトしたもののなかなか返信をもらえなかった。そこで次に、タマサート大学へのアプローチに力を入れることにした。しかし、OBの仲介があったのにも関わらずタマサート大学とも連絡を取ることができなかった。そのような時、一橋の空手部がチュラロンコン大学の空手部と毎年交流をしているという情報を得たことでそこを通じてチュラロンコン大学のバレーボール部の部員と繋げてもらえることに成功した。繋げてもらえたのはよかったものの直接連絡を取っても返信が遅かったりと、私たちとの交流にあまり乗り気でないように感じられ、私たちと交流してもらえるように説得し、実際に交流日程を決める作業は難航した。最終的にはひとまず交流日程を確定させ、正式にチュラロンコン大学のバレーボール部と交流することが決定し、そこから交流日程の詳細を詰める作業に入った。

タイに到着し、実際に今まで連絡を取っていたチュラロンコン大学のバレーボール部と対面してみると今まで連絡を取っていた時とは打って変わってとてもウェルカムな雰囲気を感じた。私たちは滞在中チュラロンコン大学内の寮に宿泊させていただいたのだが、そのチェックインを付きっ切りで通訳をしながら手助けしてくれたり、懇親会の際も終盤には

ぜひこれからも交流を続けたいと言ってもらえたりした。滞在中毎日私たちのバスをアテンドしてくださったガイドのノッポンさんもおっしゃっていたが、タイ人は時間などにルーズな人が多いそうで、私も実際に彼らに会うことによって、今まで連絡などが遅かったのは別に交流に対するモチベーションがなかったわけではなくそのような国民性なのかもしれないと身をもって知ることができた。

このように日本以外の人と何もないところから一緒に何かを作り上げることは、言葉の壁や価値観の違いなどからとても難しいことを今回の遠征を通して感じた。しかし大変な分、実際に会って交流できた時や、また会いたいなどと言ってもらえた時は人一倍嬉しく、この遠征を通じてこのような経験をすることができたのは私にとってとても貴重であった。

日程詳細

8月6日(月曜日)　1日目

7時20分に成田空港に集合し、日本時間9時25分発のチャイナエアラインCI107便で台北桃園空港へ。台北桃園空港でチャイナエアラインCI835便に乗り継ぎ、タイのスワンナプーム空港へ。現地時間16時20分に到着。現地ガイドのノッポンさんと合流した後、手配バスに乗り宿泊先の大学寮へ。この日は、移動のみで終了。

8月7日(火曜日)　2日目

手配バスにて大学寮を出発、9時に日本大使館に到着。文部科学省から外務省へ出向し、在タイ日本国大使館にて勤務されている、本学OBの久芳一等書記官からお話を伺った。ご自身の経歴、大使館業務、日本とタイの関係についてなど有益なお話を伺った。事前に行った勉強会でタイ経済について予習していたこともあり、活発な質疑応答が行われた。

その後は、独立行政法人日本貿易振興機構(JETRO)バンコク事務所を訪問した。JETROでは、「中進国の罠」やタイとラオスの経済状況をお聞きした。事前の勉強会で話になることが多かった「中進国の罠」であるが、今回の訪問によりそれに関する疑問や解決策など

をお聞きすることができ、非常に有意義なものとなった。また、その後の質疑応答では、さらに理解を深めることができた。

午後はタイトヨタの BANPHO 工場を見学した。現地工場スタッフの英語による説明を聞きながらトヨタ生産方式を学んだ。安全で快適な車を作るためのライン化された車両生産工程は非常に正確なものであった。また、従業員が快適に労働に従事するための労働環境も見学することができた。

夜には、日本人会館本館にて如水会バンコク支部夕食会に参加した。タイで勤務されている多くの OBOG に参加した頂き非常に豪華な夕食会となった。諸先輩方から社会で働く上でのアドバイスや就活に関するお話を頂き、有意義な会となった。また、タイにでの生活のことなども色々と話した頂き、大変盛り上がった夕食会となった。

8 月 8 日(水曜日)　3 日目

9 時に手配バスにて宿舎を出発。バスに乗ること 1 時間半、ワット・ヤイ・チャイモンコンに到着。アユタヤ朝期に建立されたこの遺跡は高い仏塔からの景色が壮大であり、戦で欠けた仏像や城壁からは歴史を感じることができた。昼食は、近くのカンタリーホテル、アユタヤにて頂いた。

手配バスでまた 1 時間、ワット・マハタートに到着。こちらの遺跡もアユタヤ朝期に建立された。しかし、1760 年頃から始まったビルマとの戦いにより多くの仏像、城壁が破壊

された。木々の根に埋まった仏像が有名なこの寺院には観光客は勿論、多くの熱心な仏教徒が散見され、タイの宗教文化の一部を垣間見ることができた。

その後訪れたワット・プラ・シー・サンペットにおいては象乗り体験をすることができた。戦争において象は王を守り先頭を切って戦うことから勇気と誇りの象徴とされていたり、また、白い象が仏陀の化身と崇められたりすることからタイの人々にとって象は非常に大切な存在とされている。そうした価値観を今回の象乗り体験では感じることができた。

3時にアユタヤを出発。5時にアジアンティーク・ザ・リバーフロントに到着。班別に見学した。ニューハーフショーや多くの民族雑貨店、活気に満ち溢れた飲食店街などで有名なアジアンティークにて部員は土産を買ったり、タイのエスニック料理に舌鼓を打った。帰りは最寄りの駅まで無料のシャトルボートに乗り、チャオプラヤー川からアジアンティークや近くのビル群を眺めつつ帰路についた。

8月9日(木曜日)　4日目

手配バスにて宿舎を出発。弊部OBである吹野さんの御学友であるArinさんが社長を務めるEMINENCEの企業見学をさせて頂いた。そこではEMINENCEという企業については勿論、タイの医療事情についてなども詳しく聞かせて頂いた。日本と同じく高齢化が進もつ

つあるタイにおいて日本の医療業界におけるノウハウは参考になる点が多く、タイと日本の医療業界は非常に密接な関係にあるということが分かった。多くの質問も飛び交い、非常に有意義な時間となった。昼食は EMINENCE の御厚意で大戸屋のお弁当を頂いた。

2 時に大学寮に戻ると、3 時よりチュラロンコン大学との交流試合を行った。なれない環境に戸惑う部員が多い中始まったレギュラーチームでの試合は、セットカウント 2-3 で敗れてしまった。その後、B チームでも試合を行い、交流試合 1 日目は終了した。その後、大学内の食堂にて懇親会を行った。広く豪華な食堂では多くのタイ料理が出された。懇親会では多くの部員がチュラロンコン大学の学生と語り合い、交友を深めていった。

8 月 10 日(金曜日)　5 日目

手配バスで８時に宿舎を出発。国立博物館を班別で見学した。博物館には、タイの文化史・美術史に関する多くの遺跡品が 1000 点ほど所蔵され、また、多くの歴史的建造物が博物館敷地内に建てられていた。日本とは違った雰囲気をもつ遺産の数々はタイという国の特色を色濃く表しており、非常に興味深かった。手配バスでカオサン通りに移動。ここ

でもまた班別で行動し、各班で昼食をとった。多くの民芸店が立ち並び、観光客で賑わっている姿を見ることができた。

2時に宿に戻ると、昨日と同じように3時より交流試合を開始した。当日は、チュラロンコン大学の女子バレーボール部も交流に参加し、弊部女子部との交流試合を行った。レギュラーチームの試合結果はセットカウント0−3で敗北した。試合が終わるとすぐ、大学内の一教室に移動しチュラロンコン大学との交流討論会を行った。討論会では、性の多様性についてを話し合った。事前の勉強会の成果もあり、非常に活発な議論が行われた。9時より大学近くの中華料理屋にて交流夕食会が行われ、部員だけで行われた夕食会は非常に賑わい、先日以上に交友が深まり、今後の交流を共に誓い合った。

8月11日(土曜日)　6日目

7時半に手配バスに乗り宿舎を出発。8時半にタリンチャン水上マーケットに到着。水上マーケットを回る船に乗り、見学した。日本にはない独自の文化である水上マーケットは非常に興味深いものであった。川からは多くの寺院が散見され、ここでもまた10時半に水上マーケットを発ち、ワット・プラケオに向かった。ここでは、有名なエメラルド寺院や大きな金色の涅槃像など多くの歴史的遺産を見ることができた。ワット・プラケオ以降は班別での行動を行った。出発前、各班話し合いを重ね、行き先を考えた甲斐あり、全班有意義な班別行動となった。夕食も各班で取り、タイでの全行程を終えた。

8 月 12 日(日曜日)　7 日目

早朝 5 時に大学寮を出発。6 時半にスワンナプーム空港に到着。8 時 35 分発チャイナエアライン CI838 便に乗り、バンコクを発った。台北桃園空港で無事乗り継ぎを済ませ、チャイナエアライン CI108 便に乗り日本へと向かった。少々の遅れがあったものの 7 時には、成田空港に到着。遠征での全行程がここで終了した。

Ⅱ. 部門別報告

(1)交流・討論会部門報告

総括①(チュラロンコン大学との交流全般)

4 年 平林 凜太郎

【日時】2016 年 8 月 9 日・10 日
【場所】チュラロンコン大学キャンパス
【概要】
チュラロンコン大学は 1917 年に創立され、チュラロンコン大王に名を由来するタイの最高学府である。弊部が一昨年におこなった台湾遠征では国立台湾大学との国際交流を通じて現地の文化・トレンド、対日感情などを深く知ることが出来た。本遠征でも同年代の優秀な学生との交流からタイの実情を学ぶべく、滞在中 7 日のうち 2 日間を交流に充てた。交流内容は大別して(1)親善試合・(2)交流討論会・(3)交流夕食会の 3 つである。詳細は各ページに譲るが、本稿では交流全体を通して感じたチュラロンコン大学の学生のカルチャーについて触れたい。

私たちはチュラロンコン大学の大学寮に宿泊し、毎朝食を学食で摂った。また、体育館への移動を通してキャンパスの広大さには大変驚かされた。聞けば、チュラロンコン大学の卒業生には大企業への就職が殆ど約束されているとのこと。その入試選抜の厳しさ、周囲がチュラロンコン大学生に懸ける期待の大きさは日本の比ではないことを感じた。将来タイの政治経済を担う可能性がある学生たちと交流を持てたことは私たちにとって大きな財産であると言えよう。

一方で、交流討論会および交流夕食会の会話では英語表現のレベルは我々と大差なく、ジェスチャーを用いてのコミュニケーションも多く見られた。共に英語が母語でない者同士、意思疎通には苦労しつつも、チュラロンコン大学生が明るくコミュニケーションを持ちかけてくれたことで互いの会話が弾み、両国のジェンダー事情について詳しく話し合うことが出来た。チュラロンコン大学生は常に自らの性や嗜好をオープンにし、ジェンダー差別や法的な格差を私たちほどに深刻な問題として捉えていない。チュラロンコン大学バレーボール部には男性カップルもいたが、周囲が至極当然のものとして接している姿に、自分もまた偏見に侵されていることに気付かされ、日本との大きな違いを感じた。

また、多くのチュラロンコン大学生は日本に好意的な姿勢を持ち、自動車等の産業製品、京都といった観光地に興味を示していた。最終日にお土産として持参したタオルを渡したところ、チュラロンコン大学オリジナルのキーホルダーをいただき、互いの交流をより深めることが出来た。両国を訪れた際に互いを助け、今回築いた関係性をより発展させていけるよう、SNS 等も活用しながら継続してコミュニケーションを取っていきたい。

総括②(チュラロンコン大学との交流試合)

4 年 栗本寛久

【日時】2018 年 8 月 9・10 日
【場所】チュラロンコン大学体育館

海外遠征における交流試合はバレーボールを通じて相手校との交流を図るという位置づけである。しかし、同時に秋のリーグ戦を 1 カ月後に控えた我々にとっては日頃の練習の成果を試す貴重な機会でもあり、タイのナショナルリーグ（社会人チームを含めたリーグ）の 2 部に所属するチュラロンコン大学は絶好の相手であった。試合の詳しい流れについては他の担当者の報告を参照していただくとし、私からは男子部の試合を守備面・攻撃面の双方から振り返りたいと思う。

守備面においては「対応力のなさ」が浮き彫りとなった。同じような攻撃パターンで何度も得点されてしまうシーンが多く、初めて対戦するチームに対して最初のセットで相手チームの特徴をつかみ、2 セット目以降で修正し対応する力が足りていないと感じた。ブロックにおいてその傾向が顕著に出ていたため、ブロッカー同士だけでなく、レシーバーとも積極的に意見を交わしていく必要があるだろう。

攻撃面においては、攻撃のバリエーションがあるにもかかわらず効果的に使用できなかったことが残念であった。速攻や平行トス（低いレフトへのトス）は遠征前に重点的に取り組んできたが、劣勢の中でアタッカー・セッターともに余裕がなくなりトスが合わず単調な攻撃になる場面が多かった。今後はセッター・アタッカー共々どんな状況でも自信をもって使えるまで攻撃の精度を高めていきたい。また、全体を通じて 15 点前後の勝負どころで粘ることが出来ず、相手に連続得点を許し、セットを落とすことが多かった。そのため、どのローテーションでも確実に得点できるような攻撃パターンを秋リーグまでに確立し、サイドアウトで試合の要所や苦しい場面を乗り越えられる力を養いたい。

女子部については、近年タイでは女子バレーの人気が高くレベルも上がっているらしく、チュラロンコン大学の女子バレー部のレベルもかなり高いものであった。一橋大学の女子部にとっては日頃できない高いレベルの相手と試合をすることが出来、試合の結果は別にして非常に有意義な経験となったと思われる。

以上のように、プレー面においては課題が多く見つかり収穫のあるものであったが、さらに、試合を通じて相手校の選手とふれあうことができ、試合後の夕食会や討論会で親睦を深める際の一助となったと感じる。特に女子部の試合では相手校からメンバーを数名借りて試合をしたため、試合中からコミュニケーションをとる機会多く、良い交流の場となっていた。

総括③(チュラロンコン大学との交流討論会)

3 年 比氣朋訓

【プレゼンテーション及び討論の感想】成果

本報告書では、議論の導入として私と炭本が担当したプレゼンの内容に触れ、討論会を簡単に振り返りたい。プレゼンは、炭本が多様な性に関する基礎知識の提供を、私が同性婚に関する法制度の説明や、私たちプレゼンターの提言及びその後の討論の心構えの伝達を担当した。まず、同性婚については、両国とも法的な保障がないが、タイでは公式な結婚を重視しない人もいて、同性婚制度の不在は問題にならないない場合があることに触れた。この点については実際にそうなのか討論の際に質問してみたが、もちろん可能なら認めてほしいが法的な権利にはそこまでこだわらない、という回答が得られた。また、討論の心構えについては、「テーマについて自由に話してほしい」「必ずしも結論に至る必要はない」と伝え、参加者たちが発言しやすい環境を整えることを意識した。これは、一昨年の台湾遠征の際の交流討論会を経て、学術的に高度なテーマより自分の気持ちや感じ方を話す形の方が対話を図りやすいのではないかという意見が出たため、テーマの選定段階から意識してきたことだった。実際、本番の討論を傍で傍聴していた本学 OB からは、「一昨年の台湾遠征のときよりレベルアップした討論だった」という評価を受けることができ、タイの人たちの考えを知って学びを得られた弊部の学生も多かったようで何よりだった。具体的には、「性別よりその人が何をしたかが大事という言葉に胸を打たれた」「タイの人はとにかく自由で LGBT でも何も気にしていない、私たちが難しく考えすぎなのかもしれない」などの感想があがった。タイの人の多様な性への寛容さが私たちの想像以上であることを討論会を通じてより深く感じることができた。貴重な経験だったと思う。

【勉強会(討論練習)との関連】課題

討論の練習は、7 月中に 3 回、各 1 時間程度行った。1 回目は、テーマ(多様な性)についての知識の整理と日本語での討論の練習、2 回目は、私と炭本のプレゼン及び英語での討論の練習、3 回目は、本番の議論を予想しながらの打ち合わせ兼討論練習、といった形で開催した。しかし、英語での討論練習を想定した回でもつい日本語で話してしまう班があり、英会話に自信がある部員はほとんどいなかったというのが現状である。正直なところ、本番の討論が盛況を見せたのも、交流相手校であるチュラロンコン大学の学生が場を盛り上げ話しやすい雰囲気を作ってくれたことによる部分が大きく、中には、自分から話を切り出せない学生も見られた。台湾遠征以降、弊部は部員全員で TOEIC を受験するなど英語力向上のための取り組みを行ってきたが、やはり英“会話”の経験を積んでおかなければ、英語を“話すこと”へのネガティブイメージの払拭にはつながらず、討論会に対する積極的な準備を促すことも難しいのではないかと痛感した。次回以降の遠征・討論会担当には、今回の討論会で皆が抱いたであろう向上心をいかに維持し、多くの英会話経験を積

んで本番への自信に繋げることができるか、試行錯誤しながらより質の高い討論を作り上げられるよう頑張ってほしい。

内容詳細

- 交流試合
- 交流討論会
- 交流夕食会

交流試合①(1 日目Ａ)

3 年　渡部龍生

【日時】2018 年 8 月 9 日
【場所】チュラロンコン大学　体育館
【概要・感想】

タイ遠征 4 日目、本遠征の一つの大きな目玉であるチュラロンコン大学との交流試合が行われた。試合開始前から、日本では感じられないような相手チームの雰囲気を感じることができた。お互いに同じコートをつかって試合前練習をしているとボールが相手チームの方に転がってしまうことはよくあるが、チュラロンコン大学の選手がミスしてボールが飛んで行ってしまい、私がそのボールを拾って返したところ手を合わせて丁寧に感謝の気持ちを伝えてくれたのである。そんなことが交流試合を通して何度もあった。何気ないシーンであるように思えるが、普段の日本での他校との練習試合、2 年前の国立台湾大学との交流試合などと比較しても、私にとっては新鮮な感覚であった。このシーンひとつに、タイという国の風土、文化を感じることもできたのだと思った。

肝心の交流試合の方は、我々は 9 月中旬から秋リーグを控えていることもあり、その前哨戦ともいえる位置づけだった。1 セット目、日本の体育館とは、照度、床、広さなど全く異なる環境に苦しんだこともあり、チーム全体的に身体が思うように動かず、レセプションも乱れて 19-25 で落としてしまう。しかし、チュラロンコン大学も万全のメンバーではなかったこともあり、チームとしての穴は存在していた。気を引き締めて迎えた 2 セット目、チュラロンコン大学のサーブミスに助けられ、また一橋大学も少しずつブロック、サーブが決まりだし 25-21 で取り返す。3 セット目、15-15 まで両者譲らない展開となるが、そこから一

橋大学はミスが相次ぎ相手に5連続得点を許してしまい、その流れのまま23-25で落とす。4セット目、チュラロンコン大学のサイドが威力を発揮する。このセットも15-15まで接戦が展開されるが、そこから一橋大学は4連続得点を許し、23-25で落とす。本来の5セットマッチであればここで試合終了だが、チュラロンコン大学の提案でもう 1 セット行われることになった。5 セット目、一橋大学のサイドが力を発揮、終盤の追い上げをかわし、25-23で勝利。最終的な結果としては、2-3で敗北という形になってしまったが、学ぶことは多かった。チュラロンコン大学のプレーヤーは私たちが普段練習試合をするようなチームのよりも個々人の技術は成熟しており、球際のプレーは見習わなければならない部分が多くあった。そして何より、彼らはバレーを楽しんでいるように見えた。聞くところによると、バレー部の練習は練習したい人が来るというような自由参加の面があるという。バレーをのびのびと自由にやっているという点も、日本の体育会系部活にはあまり見られない点だと感じた。今回の交流試合を有効に活用し、秋リーグ目標の優勝を遂げることができるように練習に励んでいきたい。

交流試合②(1 日目Ｂ)

3年　塚田源

【日時】2018年8月9日
【場所】チュラロンコン大学体育館
【概要】
　タイ遠征 4 日目、本戦後 1.2 年生を中心としたベンチメンバーによる新人戦を行った。勝利して本戦の雪辱を果たすべく、闘志を燃やして試合に臨んだ。1セット目、序盤ミスが重なり 5-12 と大きくリードされる。中盤サービスエースや2年青木のブロックなど、盛り返す場面も見られたが、終盤まで相手の強力なサイド攻撃を止めることができず、13-25でセットを落とす。2セット目、序盤1セット目とは打って変わって一橋が主導権を握る。連続のサービスエースやクイック攻撃などで流れをつかみ、14-8 とリードする。終盤相手のサイド攻撃に押され、22-20 まで追い上げられるが、1 年シモンのブロックで 25-21 とし、2セット目を奪取する。3セット目、序盤連続のサーブミスで失点、その後、サーブカットが乱れ、上手く攻撃を展開できず相手に連続得点を許す。その後もミスが重なり、8-18 と大きくリードされる。その後相手のミスもあり追い上げるが、かなわず、17-25でセットを落とす。結果、セットカウント1-2で一橋の敗北となった。
【感想】
Aチームの雪辱を果たすことは出来ず、結果として本戦、新人戦ともに敗れるという悔しい結果になってしまった。全体としてまだまだ自分たちのミスが多く、如何に一つ一つのプレ

ーの質をあげ、丁寧でミスのないプレーをできるようになるかが大切であることを痛感した。しかし、新人の全員が少なくとも１回はコートに立ち、試合の経験を積めたこと、そして各々課題を見つけられたことは大きな収穫だった。また、試合前はお互いにぎこちなかったが、試合後にはお互いに打ち解けることができ、改めてスポーツが言語を超えたコミュニケーションツールになり得ることを実感した。

交流試合③（２日目Ａ）

３年　笠原凜太郎

【日時】2018/8/10

【場所】チュラロンコン大学　体育館

【概要】

タイ遠征５日目、午後３時からチュラロンコン大学のバレー部と交流試合が行われた。Aチーム戦は５セットマッチということで３セット先取すれば勝利となる。前日の交流試合では惜しくも１セットを取ったものの先に３セットを取られてしまい敗北。前日の雪辱を果たすべく前日より一層声を挙げ、挑んだ一戦であった。まず１セット目序盤は点の取り合いが相互に続き一進一退の戦いが続いた。その中でも前日に苦しんでいたブロックが炸裂し序盤にブロックで４得点をあげるなど前日の反省を生かしたプレーをすることができた。しかしながらアップが完全ではなかったのかこちらの攻撃による得点がなかなか入ら

ず相手のミスに救われながら接戦を繰り広げた。流れが変わったのが 13-15 からである。相手のライトアタックに翻弄され連続失点を許してしまう。途中流れを切るものの再び連続失点を許してしまい 14-19 まで離されてしまう。一橋は思うように攻撃ができない中、センターからの攻撃も使えずサイドの攻撃一辺倒となり相手を崩すことができないまま連続失点をそのまま許し１セット目は 19-25 で落としてしまう。

２セット目は序盤相手のミスに救われながらもレフトスパイクとミドルブロッカーのブロックが炸裂し同点のまま 14 点まで進む。しかしながら 15 点目からこちらのミスが連続で続き一挙に相手に 3 点を与えてしまう。なんとかレフトの南がスパイクで得点を重ねたおかげで点差を縮めることができ 24 点目で追いつきデュースになる。なんとか食らいつく一橋であるが惜しくも２点連続で取られ 26-18 で２セット目を落とす。

3 セット目、ここでセットを取られると一橋の敗北が決まってしまうので負けてはならない一戦。序盤両サイドのスパイクによる活躍とブロックが炸裂し４点リードする。しかしすぐに連続３失点を与えてしまい１点差にまで追い詰められる。それでも必死に食らいつく一橋はレフト、ライトのスパイクが両方決まったことで再び差を広げる。そして 15 点目で一挙に連続 5 得点を取り、流れに乗る一橋。このまま逃げ切りセットを獲得できるかと思われたが、相手のスパイクに翻弄されて 7 点取られ逆転を許してしまう。そのままこちらが連続得点することもなく結果 22-25 で３セット目を落としてしまう。結果３セットとも相手に取られてしまったのでセットカウント 0-3 で一橋の敗北が決定した。

【感想】

まず対決初日の雪辱を果たすことができず非常に残念であった。初日の反省を踏まえてブロックの位置、サーブの狙い目などより考えたバレーができると思ったが前日とは異なるメンバーに翻弄されうまく反省を生かすことができなかった。しかしながら一橋では見ることのないスパイクのフォームや頭を使ったうまいプレーからは多くの学ぶべきことがあったと思う。また特にボールに対する執着心は非常に強かったと思う。ボールは全く落ちないし割れたトスもどんなに悪い体制からでも打って少しでも相手を崩そうとすることからはとても負けず嫌いで真剣な姿が理解できよう。またただ負けるだけではなくてブロックの位置が悪いなら少しずつではなくて思いっきりブロックの跳ぶ位置を変えてみたり、新しいクイックを使ってみたりと試合中に臨機応変に対応できるチーム作りの練習としてチュラロンコン大学の試合はとても良い試合であったと思う。こうした反省を踏まえて秋のリーグ戦にも挑んでいきたい。

交流試合④(2 日目 B)

1 年 田中佑弥

【日時】2018 年 8 月 10 日
【場所】チュラロンコン大学　体育館
【概要】
　タイ遠征 5 日目の午後、2 回目のチェラロンコン大学との交流試合が行われた。遠征 4 日目の午後に行われた B チームの試合は 1-2 で惜しくも破れており、また直前に行われた A 戦の 0-3 という非常に残念な結果の屈辱を果たすためにも、全力で試合に臨んだ。
　第 1 セット目、序盤は両チームにレセプションやスパイクミス等が続き、点差が開かずにゲームが進んだが、チェラロンコン大学のエースの 2 番や 5 番に連続得点を決められ、6-10 と大差をつけられる。そこからなんとか一橋のサイドアタッカーがスパイクを決めサイドアウトが続くも、レフトからの連続アタックミス、チェラロンコン大学のサービスエース等で中盤に一気に流れを持っていかれる。結果 7.8 点を常に追いかける状況になり、終盤には各所で一橋大学のいいスパイクが決まるも流れを変えられず、最後はこちらのサーブミスという非常にもったいない形で、第 1 セットを 15-25 という大差で落とす。
　このセットを取られたら後がない第 2 セット、最初の得点は一橋大学のミスで相手に取られる。序盤はこちらのサーブミスが 2 回続き流れを持っていかれそうになるものの、チェラロンコン大学もスパイクミス等で失点を重ね、8-7 と拮抗したゲームになる。しかし中盤、一橋大学側の攻撃がサイド頼みになり、ブロックにマークされ決定率が落ちていき、逆にチュラロンコン大学は 3 番、8 番、13 番などのサイドアタッカーの調子が上がり次々と点を決め、一橋大学は簡単にブレークを許してしまう。そのまま 11-19 と 8 点差をつけられ苦しい状態になり、相手のミスでしか点が取れないほど追い込まれる。そんな中、終盤で一橋大学の強気のセンター攻撃が決まり、その流れでサイドも得点を取り 17-22 と粘る。だがチェラロンコン大学のサイド攻撃を止めることができず、最後は一橋大学がレセプションミスをし、18-25 で第 2 セットも落とす。結果、セットカウント 0-2 で一橋大学の敗北となった。
【感想】
B チームは 4 日目の、セットカウント 1-2 の敗北の雪辱を果たせず、残念な結果となった。チェラロンコン大学は人数が少なかったため A チームのメンバーも数名出場しており、相当な実力差があると痛感した。特にセッターのトス回しにブロックが遅れ、サイド攻撃に対して全く対処できなかったことが大きい。
試合の前後の挨拶では、タイ語でコミュニケーションをとることができとてもいい雰囲気だった。また、討論会の自己紹介の際にもバレーの話で盛り上がることができ、学生との

交流における重要なツールになった。このように、試合を通してよりチュラロンコン大学の学生との交流を活発にできたと思う。

以下、ベンチメンバーを掲載します。

背番号	氏名	学年	背番号	氏名	学年
1	本田	1	１４	比氣	3
2	田中(佑)	1	１５	吉田(大)	3
3	林	1	１６	住吉	4
4	瀬賀	1	１７	今井	3
5	南	2	１８	吉田(陽)	3
6	小俣	1	１９	相川	4
7	青木	2	２０	笠原	3
8	栗本	4	２１	石田	3
9	シモン	1	２２	渡邊	3
１０	平林	4	２３	阪口	3
１１	多田	2	２４	渡部	3
１２	田中	2	２５	塚田	2
			２６	左右田	1

スターティングオーダー

Aチーム
(1 日目、2 日目同様)

栗本　笠原　阪口
南　多田　本田
(リベロ　渡部)

Bチーム

シモン　青木　瀬賀
今井　吉田　塚田
(リベロ　渡邊)

女子バレーボール部交流試合

今回の遠征では、遠征史上初の女子バレーボール部による交流試合も行われました。タイにおいて、女子バレーボールは人気であり、チュラロンコン大学女子バレーボール部は非常にレベルが高く参考になりました。試合に関しては、1試合目は女子部の世紀部員三名にバレーボール経験者の男子部マネージャー3名を加えたチームでチュラロンコン大学女子バレーボール部と対戦しました。2試合目は弊部の正規部員3名とチュラロンコン大学女子バレーボール部による混合チームによる交流試合を行いました。

以下、ベンチメンバーを掲載します。

背番号	氏名	学年
2	田北	2
3	安達	2
4	中村	2
	旭	3
	山田	3
	今村	1

スターティングオーダー

田北	山田	安達
旭	中村	今村

交流討論会①

2 年 炭本奈都子

【日時】2018 年 8 月 10 日 19 時~20 時 30 分頃
【場所】チュラロンコン大学
【概要・プレゼン】

当日は、午前中に国立博物館とカオサン通りの視察をおこない、午後はチュラロンコン大学体育館にて午後から交流試合をした後、場所を移して交流討論会を開始した。まずは司会の 3 年吉田陽、1 年シモンから討論会全体のアウトラインの説明があり、次に班ごとに自己紹介をした。そして今回のテーマ「What should we do in order for many people including sexual minorities to live happy lives?」に関し、３年比氣と私で英語によりプレゼンをおこなった。その後班別に 15～20 分程度議論の時間を設け、班の代表者が議論を総括した。最後に石川部長が謝辞を述べ、記念品の交換、全体での写真撮影を経て討論会は終了した。

本来は自己紹介の前後に軽くアイスブレイクの時間を設け、親睦を深めて議論がしやすいようにしておく予定であり、3 年笠原がその準備にあたっていた。しかし前日・当日の交流試合、また前日の交流夕食会でその必要がなくなったと思われたため、割愛した。

私と比氣が担当したプレゼンに関しては、事前学習の段階から日本語・英語による練習をおこなっており、また直前にも打ち合わせや通し練習を通じて準備を重ねていた。当日に関しては、石川からの助言もあり、今回はレジュメを各班に１部と参加 OB１名につき１部用意した。また、本来大画面にスライドを映して全体でそれを見る予定だったが、手違いでプロジェクターを確保できていなかった。そのため、私物のパソコンを持ってきていた部員から借りて班に１台パソコンを支給し、スライドを見るのにはそれらを使用した。

【班別発表】

プレゼンの後に班別の議論を経、班ごとに代表を１～２人出し、議論の結果を発表した。最初に発表した数班は、チュラロンコン大学の学生を代表にしていたが、彼らが非常にフランクで、和やかな雰囲気の中で発表がおこなわれた。また、タイの男子バレー競技者の多くは性的マイノリティらしく、相手校の学生の大半もゲイであったが、それを隠すどころかオープンに話していた。残りの班は一橋の学生が代表を務めたが、彼らも英語で班の議論の総括を述べた（写真を参照のこと）。日タイ双方の学生が積極的に議論に参加した証ではないかと思う。

交流討論会②

1年　シモン・ナイ

【日時】2018年8月10日19時～20時30分頃
【場所】チュラロンコン大学
【班内での話し合い】

交流試合をした後、一橋の学生はチュラロンコン大学の学生の先に交流討論会の場所に移動して、交流討論会の準備を行なった。まず、一橋の学生は自由行動の班ごとに分かれ、次にチュラロンコン大学の２～４人学生が自由行動の班に入った。それから、交流討論会が開始した後、班内ごとに借りたパソコンで映ったスライドの写真を使い、一橋の学生が名前、学部・専門とポジションなどを自己紹介をしてから、チュランロンコン大学の学生も自己紹介しながら、仲良くなるため、軽く話し合った。

さらに、３年比氣と１年炭本で英語によりプレゼンの後に、班別に15～20分程度議論が始めた。班ごとに話し合った時、大学生たちの皆はうまく英語が話せなくても、タイと日本語に訳したため、分かり合えた。そして、分かり合えたため、班ごとの討論はよく進めることができ、うまく自らの意見を伝えることができた。

チュラロンコン大学の学生は「sexual minorities」に関する差別の問題点より、「sexual minorities」と一緒に生活しているのいいところに注目した。例えば、ゲイの男と女性が女性同士の友達と同じくらい仲良くなり、ゲイの男が男の体を持っているため、一緒にいると女性を守ることができる。これに対し、一橋の学生は日本に行っている「sexual minorities」に関する差別の問題が解決できる方法を注目した。例えば、どうやってトランスジェンダーの男女はトイレーを選ぶ不安をなくするようにできる方法を考えた。

【感想】

班内の話し合いに関しては、班ごとに自己紹介した時、スライドの写真は本当にわかりやすく自らなことを自己紹介するのに役に立った。そして、一橋の学生はタイに来た前の勉強会で討論会の練習をした。それに対して、チュラロンコン大学の大学生は同じような練習をしていないにも関わらず、いい討論ができて本当に良かったと思います。そして、両側の大学生はテーマの視点が違っていたからこそ、討論うまく進むことできたと考えられる。さらに、両側の大学生はテーマの視点が違っても、他の意見を認められたので、皆は積極的に討論へ参加できたと思う。

班内での話し合い時、発見しことはどうして大勢なゲイのタイ人がバレーボールをやっているかの理由だ。この理由は２０年前に出た映画には、ゲイのタイ人はバレーボールの強いチームを作り、大きい大会を勝利したからだ。そのため、このバレーボールチームのメンバーはゲイでも他の人々と同じく強くなることができるので、大勢なゲイのタイ人はこの

チームメンバーのように強くなりたいため、バレーボールを始めた。このような映画は多くのゲイのタイ人に影響できるのはとてもすごいと思う。

交流夕食会①（１日目）

４年　和地 由布奈

【日時】2018 年８月９日(木)20：00～22：00
【場所】CU キャンパス内フードコート
【概要】
交流試合を終えると、体育館から徒歩 10 分ほど歩いたところにあるキャンパス内のフードコートで交流夕食会は行われた。フードコートではステーキ、パスタ等さまざまな料理を頼むことができたが、多くの学生がトムヤムクン、パッタイといった現地の食べ物を頼み、近くに座る人々で料理をシェアする形式であった。チュラロンコン大学からは OG の方に加えて 10 人前後の学生が参加してくださり、各テーブルでは日本とタイ両国の学生の間でそれぞれの食文化や大学生活などの話題について話し合った。チュラロンコン大学の学生と直接話をするのは初めての場であったが、タイの学生の明るい性格もあり、多くの学生がお互いに英語で密にコミュニケーションをとることができたようだ。翌日の試合や討論会に備えて 22 時頃には解散となったが、非常に有意義な時間を過ごすことができた。
【感想】
今回の交流夕食会では、チュラロンコン大学の学生と直接話をすることで彼らの明るい人柄やホスピタリティを強く感じることができた。チュラロンコン大学の人々は初対面であるにも関わらず店員と間違えてしまうほど気さくであり、終始笑顔で場を盛り上げてくれたため、会は非常に和やかな雰囲気であった。

また、私たちの拙い英語に対しても最後まで耳を傾けてくれ、彼らの話が聞きとれずに私たちが聞き返した際にも優しく言い直してくれた。しかし、交流を通して英語でのコミュニケーションの難しさを改めて実感したため、今後日本に帰ってから英語の勉強に取り組んでいきたいと思う。学生のうちに海外の学生とこのように密にコミュニケーションをとることができたことは非常に貴重な経験であったと感じる。

交流夕食会②（二日目）

4 年　相川泰輝

【日時】　2018 年 8 月 10 日
【場所】　チュラロンコン大学近くのタイ料理店
【概要】
　討論会が終わった後、チュラロンコン大学近くのタイ料理屋さんで二日目の交流夕食会が行われた。白米・麺に鶏肉や豚肉をのせたカオ・マン・ガイをいただいたが、日本風の薄味でとても食べやすく、チュラロンコン大学の優しさを感じた。この日は女子部の試合も行われたので、チュラロンコン大学の女子部員も新たに参加し、また討論会で白熱した議論を交わした後ということもあり、互いに緊張することなく和やかな雰囲気で夜遅くまで交流を深めることが出来た。食事の席では、バレーボールや自身の専攻について話しただけでなく、チュラロンコン大学のＯＢの方もいらっしゃったので、日本で働いていた時の話やタイと日本の違いなど、多様な話を聞くことができ、大変有意義な時間であった。
【感想】
　チュラロンコン大学との交流はたった二日間であったが、直接話が出来るという点で交流夕食会は大変貴重な場であったと感じた。英語が母国語でない者同士で、懸命に伝えあい理解し合えたことは良い経験であった。さらに、相手の学生が熱心に日本や私たちの生活について質問してくれ、彼らの日本への興味の高さ・タイが親日であることを改めて感じることが出来た。また、この交流を通して、海外の大学の多様性を痛感した。タイという国が性に寛容ということもあるが、相手校には LGBT の方もおり、そのような方と話すことは新鮮であった。やはり日本に留まっていてはあまりない機会であり、海外で多種多様な人と触れ合う機会を大切にしたいと改めて感じた。

(2)経済部門報告

総括

3 年 今井優貴

今回の海外遠征において、チュラロンコン大学バレー部との交流に次ぐ重要な目的の一つとしてタイの経済面の視察がある。視察内容としては①日本大使館訪問②ＪＥＴＲＯバンコク支部訪問③タイトヨタＢＡＭＰＯＯ工場訪問④ＥＭＩＮＥＮＣＥ訪問がある。それぞれの訪問先についての詳細は該当報告に譲り、ここでは全体を概観しつつ特筆すべき点に絞って述べたいと思う。

今回の遠征とりわけ経済面の視察は、事前勉強会抜きには語れない。それほどに事前勉強会で学習したことが実際の訪問で大いに活きた。事前勉強会では①タイの経済の歴史②日本とタイの経済的つながり③自動車産業④トヨタ(特にタイトヨタ)⑤タイ現地企業ＥＭＩＮＥＮＣＥ、の 5 つについて経済班が分担して調べ部員全体に向けプレゼンテーションを行った。加えて『タイ　中進国の模索』という本の通読も行った。①タイの経済の歴史では、主にアジア通貨危機や中進国の罠について、②日本とタイの経済的なつながりでは、貿易面での日タイ関係やＯＤＡによる経済協力について学んだ。また、『タイ　中進国の模索』の通読では、中進国の罠についてタイの歴史に沿ってより詳しく学んだ。これらで学んだことは、日本大使館訪問、ＪＥＴＲＯ訪問の際に大いに役に立った。両訪問時の職員の方のご講話の中に「中進国の罠」の話があり、事前に勉強していたからこそより深く理解することができたと同時に、学生側からの質問の機会をいただいた際にも前提知識があるからこその深い質問を活発に行うことができた。③自動車産業では工場の製造ラインや自動車産業の今後の展望を、④トヨタについてでは、トヨタ生産方式やタイトヨタの概要を学習した。実際にタイトヨタＢＡＭＰＯＯ工場を見学したことで、これらについて深められたとともに自動車工場の規模や実際に稼働している様子など直接自らの目で見学することでしか感じられないものを多く経験できた。⑤ＥＭＩＮＥＮＣＥについてでは、ＥＭＩＮＥＮＣＥの事業内容やタイの医療市場について学んだ。実際の訪問の際、英語でのご講話であったので、事前勉強による背景知識無しでは理解が難しかったと思う。ここでも英語で質問する機会をいただき、事前勉強を踏まえて活発に質問することができた。

総じて、事前勉強会によって当日の訪問が深められたとともに、日本での学習だけでは得られない、実際に訪問しなければ成し得ない経験を多くすることができた。また、訪問先の多くは個人では訪れることが難しく、海外遠征だからこそ得られた大変貴重な経験である。タイには多くの日系企業が進出しており、私たち学生のなかで将来赴任する人も少

なからずいるであろう。その際に、今回の遠征で実際に自らの目で見たり、直接話を聞いたりして感じたこと、経験したことは必ず役に立つ。また、実際にタイに赴任することがなくても、日本経済において重要な役割を担っている東南アジア経済の実態を知れたことは、将来どんなキャリアに就こうと貴重な財産になるであろう。今回のこの貴重な経験を将来のキャリアに活かしていきたいと思う。

内容詳細

- 日本大使館訪問
- JETRO バンコク支部訪問
- タイトヨタ訪問
- BANPHO 工場見学
- EMINENCE 訪問

日本大使館訪問

3 年　阪口雄基

【日時】2018 年 8 月 7 日（火）9:00～10:30
【場所】日本大使館
【概要】
　文部科学省から外務省へ出向し、在タイ日本国大使館にて勤務なさっている、本学 OB の久芳一等書記官からお話を伺った。ご本人の経歴・学生時代について、大使館の業務、タイの政治情勢、経済情勢、日本との関係、タイにおける教育事業など、幅広い内容に話題が及んだ。
【勉強会との関連】
　タイは低賃金労働力を原動力に経済成長し、中進国となった。しかし、人件費の高騰や技術力不足を原因に競争力を失ったことで、現在、「中進国の罠」とよばれる経済成長の停滞の最中にある。こうしたタイの経済情勢については勉強会で学習していたこともあり、理解が深まった。久芳氏が担当している、高等教育、専門学校の充実による産業人材育成は、正にタイの技術力向上による競争力強化を狙いとしたものである。タイの低成長打破に向けた日本の取り組みを垣間見た。日本はタイにとって最大の経済パートナーである。タイは親日国で、日本企業が多く進出している。日本とタイの戦略的パートナーシップの発展は両国にとって重要なものとなっている。久芳氏が担当するタイの優秀な学生を

日本の大学へ留学生として派遣する施策は、将来の日本とタイの架け橋となる人脈形成という側面から戦略的パートナーシップの発展を支えるものに他ならない。

【感想】

在タイ日本国大使館を外から眺めると、敷地が広く、建物が大きいといった印象を受ける。実際、約 150 人もの職員の方が勤務なさっている規模の大きい大使館であるそうだ。日本とタイのつながりの強さをここでも感じ取ることができる。今回の訪問では、教育学術分野における日本とタイの関係の深化を図る仕事をなさっている久芳氏にお話を伺うことができた。経済的に深い結びつきを持つ日本とタイの関係のさらなる発展・強化のために、様々な方面から取り組みが活発に行われている。東南アジアにおいて経済成長を遂げる多くの国の中で、とりわけタイという国が日本にとって重要な国であることは間違いないと感じた。

ＪＥＴＲＯバンコク訪問

1 年　林　慎太郎

【日時】2018 年８月７日
【場所】ＪＥＴＲＯバンコク支部
【概要】
海外遠征２日目、独立行政法人日本貿易振興機構（以下 JETRO）のバンコク支部を訪問した。そこでは中所得の罠についてのお話、とりわけタイとラオスを例にとっての説明を受けることができた。以下、我々が受けた説明を通じて学んだことについて記していきたい。まず、本題に入る前に聞いたこととしては「現場を見る」ことの大切さ、つまり統計的データに基づく平均値に惑わされてはならないということである。次にタイは先進国入りする前に高齢化社会に突入する世界初の国であるということである。この点に関してはすでに高齢化社会に突入している日本のノウハウが役に立つのではないかというお話であった。そして、本題として中所得の罠についてのお話を聞いた。まず ASEAN はよく言えば多様性があるものの、悪く言えば宗教・言語・政治体制などにおいてまとまりがないのが特徴であるということであった。一般に低所得国から中所得国になるのはどの国でも同じ傾向を示すが、中所得国から高所得国になるのは国次第であり、中所得国で立ち止まってしまうことが中所得の罠というものであるという。これを打破するためにタイでは「タイランド 4.0」という政策をとる。この政策は 10 の重点産業への投資拡大を図るとともに持続可能な経済成長の実現を目指すタイ政府のビジョンであった。ラオスでは所得を 2016 年から 2030 年までに 4 倍にすることを目標とした「ビジョン 2030」という政策がとられた。この政策はダム、鉱物、ロジスティクスに投資して発展を狙うというものであった。しかし、タイにしてもラオスにしても外資頼みの他力本願なのではないか、というご意見を聞くことができた。
【勉強会との関連】
勉強会では JETRO がどのような団体なのか、具体的に何をしているのかについて学んだ。その中で現地調査を通じて海外情勢の把握に役割を果たしているということを知ったが、今回の訪問ではその詳しい調査内容についてタイや東南アジア諸国を例にとって具体的に触れることができた。
【感想】
今回、中所得の罠についてのお話を重点的に伺うことができたのは自分の見識を広める上で非常に意義深いことであった。日本が体験しなかった問題について理解し、解決策を考えることはこれからのグローバルリーダーとなるには必要なことであり、今回の経験が将来に生きることになるだろう。

↓ＪＥＴＲＯバンコクにての写真

タイトヨタ訪問

2年　南　新八

【日時】 2018年8月7日
【場所】 タイトヨタ　バンポー工場
【概要】

タイ遠征二日目、午前中は日本大使館、昼頃にJETRO、午後にタイトヨタを訪問した。タイトヨタはサムロン工場、ゲートウェイ工場そしてバンポー工場の３工場を保有していて、バンポー工場は2007年に生産開始されるという１番新しいものだった。バンポー工場では主にハイラックス（右図）とフォーチュナーというピックアップトラックの２機種を主に生産している。

タイトヨタに着くと、最初に会社に関するビデオが流され、タイトヨタがただ車を生産し利益を上げることだけが目的なのではなく様々な形で社会に貢献しようとしていることを知ることができた。さらにバンポー工場での取り組みとして広大な敷地を生かした子供の環境保全意識を高める取り組みを行なっていることや従業員のリラクゼーションとして様々なスポーツ施設が用意されていることなど先進的な側面も知ることができた。

【勉強会との関連】

勉強会では自動車の製造についてとトヨタについての２回に分けて学習した。この工場では組み立ての生産工程を見学し、ボディにエンジンや足回り、内装を流れ作業で取り付けていく様は無駄がなく非常にスムーズだった。さらに勉強会で学習した使った部品だけを部品工場から取り寄せるというトヨタ生産方式によって無駄なく作業しているということも従業員の方から説明いただいた。これにより１台生産するのに56秒という凄まじいタクトタイムを叩き出しているのにも納得がいった。

【感想】

工場内の展示ではかなりじっくり見ないとわからない傷も見逃さずにチェックしているということがわかり日本以上に徹底されているのではないかと感じるほどだった。さらにバンポー工場はタイトヨタでも最も新しい工場ということもあるが、環境への配慮だけでなく従業員への配慮も徹底しておこなわれていた。こういう先進的な部分を武器にしてタイトヨタは退治自動車シェア１位の座を獲得したと納得できた。

BANPHO 工場見学

2 年　中村優

【日時】8 月 7 日(火)
【場所】タイトヨタ BANPHO 工場
【概要】
タイトヨタ BANPHO 工場では、まずタイトヨタの活動内容・企業理念をビデオで見せて頂き、また自動車の製造工程を図と写真を使って教えて頂いた。ビデオからわかったことは、タイのトヨタでは高品質な製品を国内に提供するばかりでなく、現地の人を雇用することや、タイで作った車をアジア域内外に輸出することで、タイ社会に貢献するという目標を掲げているだ。また会社敷地内に運動場を設けるなど、社員を大切にするのも同じくらい重要視していることがわかった。そうしてビデオと工程の説明の後に実際に工場を見学した。工場では車を部品の段階から最後の完成形まで全て作っていた。また、車輪に不具合がないかなどの一部の検査も工場内で行なっていた。製造のラインはベルトコンベアを使用しており、ドア等の重い部品の運搬や組み立ては機械、細かい溶接や車内パーツの取り付けは人の手、という様に分担をしていた。
【勉強会との関連】
工場で実際に見せて頂いた製造の順番は、勉強会で事前に確認した日本のものと同じであり、(プレス、溶接、塗装、組立、検査)大きく異なる部分はなかった。しかし、勉強会では分からなかった多くの発見があった。まず、自動車の製造ラインはひたすらまっすぐにするのでなく、途中で折り返す蛇の様な形にすることで、スペースの無駄を省き、一つの長方形の工場内で完結させていた。
また、作業員の安全を確保する為に、エンジンを機械が運ぶ時などはメロディーが流れる様になっており、作業員に注意換気をしていた。その曲はメリーさんの羊など、有名なものが多く使われていた。ベルトコンベアは、動いたり止まったりをするのではなく、常に一定のゆっくりとしたスピードで動かし、作業員もベルト上にいることで、作業員が一台一台に少しかかる時間が違っても焦らず修正できる様になっていた。また工場は多くの扉を開けたままにしており、部品や完成車の運搬がスムーズに行える様になっていた。

【感想】

トヨタの案内はタイ人の社員の方がしてくださった。絶えず笑顔の絶えない方々で、またお菓子や飲み物まで用意してくださったり、ビデオで述べられていたトヨタのホスピタリティの精神は実際にも発揮されていることがわかり、感動した。また自動車の製造工程ははじめて見学したが、ジャストインタイム方式を生み出した、トヨタらしい無駄のない製造ラインは素晴らしかった。

EMINENCE 訪問

2年　玉木　里奈

【日時】２０１８年８月９日（木）　９時３０分～１２時３０分

【場所】EMINENCE

【概要】

EMINENCE という医療機器などを輸入する、現地の貿易会社を訪問させていただいた。訪問の経緯としては、会社の創設者の Erin 氏が学生時代に一橋大学に留学をしており、バレーボール部 OB の吹野さん（S40 卒）との親交があったことから訪問させていただけることになった。

到着時から、熱烈な歓迎を受け、和やかな雰囲気で始まった訪問は、会社の事業内容に関する説明から始まり、その後質疑応答に１時間弱の時間を割いて頂き、タイという国ならではの会社の特色を深く知ることができた。また、会社の創設者の方が、一橋大学出身であることもあり、当時の一橋大学での生活や印象など外国人目線からみる一橋大学を知ることができ、とても有意義な時間であった。

【勉強会との関連】

事前調査として、EMINENCE についての概要（どんな会社なのか、何をしているのか等）やタイの医療機器市場の現状などを行っていた。調査をしていて、印象に残ったのは「日本との関係が深い」ということであった。医療機器の輸入先として日本は大きい比率を占めており、EMINENCE の輸入商品を見ていると、日本語表記のある商品も多く見られた。実際、EMINENCE の説明をして頂いたボウさんの話の中で、日本との関係の深さを感じる場面が多々あり、医療機器市場における、タイと日本のつながりを強く感じることができた。今後、タイは高齢化社会に突入し、医療機器市場も高齢化社会を意識しなければならない中、すでに超高齢化社会にある日本がタイに協力できることは多くあるだろう。今以上に、タイと日本の関係が深まることを期待したい。

また、事前調査の中で、タイの医療市場は成長段階にあり、多くの国、会社がこの市場への参入を企てているというデータを得た。そして、そのような新規企業との競争を勝ち抜く術があるのかという問いを立てた。その問いを EMINENCE に尋ねたところ、現地企業ならではのネットワークがあることを強みにしているという回答を頂き、現地企業の強みを知ることができた。

【感想】

会社訪問ということで、最初は緊張が見られたが、到着時には多くの従業員の方々が出迎えてくださり、ウェルカムドリンクを用意して頂いたり、歓迎の写真が飾られていたり、熱烈な歓迎を受け、和やかな訪問になった。会社に関する質問はもちろん、日本のことや一橋大学についての質問に対しても快く回答してくださり、様々なことを知ることができた。前日にタイトヨタに訪問しており、大企業と現地企業との比較をしながら、２企業の違いや特色、強みなどを知る機会になった。

EMINENCE 前にて全体写真

(3)歴史文化部門報告

総括

3 年　吉田 大介

今回の海外遠征では、チュラロンコン大学の学生との知的交流及びスポーツ交流、大使館をはじめとして現地の政府機関及び企業への訪問、タイの歴史文化学習の 3 つを核として事前学習を積んできた。

遠征前に行われた勉強会では歴史文化班が王朝や時代区分によって分かれ、プレゼンテーションを行いチーム全体で理解を深めた。(区分: 1.スコータイ朝　2.アユタヤ朝　3.アユタヤ朝以降)

まず、スコータイ朝およびそれを属国化したアユタヤ朝について。これに最も関連した海外遠征の内容はアユタヤ視察である。ビルマ軍の攻撃によってアユタヤ朝は滅び、その中で偶然仏像の頭が木の根と一体化しワット・マハタートとなったと習っていたものの、実際に訪れてその地に身を置いてみると建造物や仏像の崩壊した痕や落ちた仏頭は写真とは比べ物にならないほどに当時の戦闘の激しさを感じさせるものであり、その悲惨さを遺跡として現代に遺そうと考えたタイ人たちの思いが垣間見えた。

次にアユタヤ朝以降の歴史について。これに関連するのはバンコク国立博物館である。スコータイ朝から現在のチャクリー朝に至るまでの歴史や有史以前の美術品など様々展示されているが今回はアユタヤ以降の展示品についてである。タイの歴史に沿いながら当時用いられた文明器具や考古学資料、民俗資料を同時に学ぶことができ、教科書では学ぶことが難しい政治、文化、芸術などの多方面から歴史をたどることによってタイの変遷を窺い知ることができた。

また、ワット・プラケオ、ワット・ポー、ワット・アルンの視察もアユタヤ以降の近代の歴史、文化に深く関係する。1767 年にアユタヤ朝が滅亡し、現在まで続くチャクリー朝が成立したのちに建設されたこの寺院は、これまでのような歴史を表すものではなくその当時における技術力、また建築様式などを知ることができた。1784 年に当時の技術力を結集させて建てられたワット・プラケオ、中国の要素を取り入れた様式で 1788 年に建てられたワット・ポー、建造された年代はわかっていないものの 1 年前に改修工事があったこともあり純粋に芸術品としての価値を帯びているワット・アルンそれぞれに違いが見えて興味深かった。

知識を蓄え写真を見て建物や建造物の形がわかったとはいえそれが歴史を理解するという行為からかけ離れていたことを現地の視察や現地学生との会話を通じて痛感した。とは

いえ勉強会を通じてこれらの歴史を知った上で海外遠征に臨めたことによって視察の有意義さが増したことは言うまでもない。その上タイの人々のバックグラウンドを知っていることは現地学生との交流の潤滑油としても一役買い、非常に実りある学習であった。これらの体験、学習は日本にいながらできることではなく海外遠征ならではの成果であると言えよう。

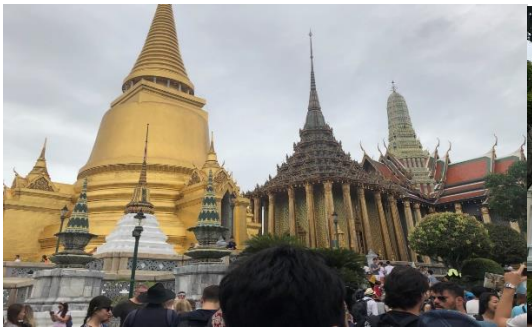
内容詳細

- バンコク見学①～④
- アユタヤ見学①～③

バンコク見学①(ワット・プラケオ)

1 年 今村遥香

【日時】2018 年 8 月 11 日
【場所】ワット・プラケオ
【概要】
当日はバスでワット・プラケオまで向かい、班別に 1 時間ほど寺院を見学した。ワット・プラケオに到着すると、まず初めに寺院を囲う白い巨大な塀が目に入った。ワット・プラケオは、タイで最も格式が高いとされている仏教寺院であり、王室の守護寺でもある由緒正しき寺院であるため、服装チェックが厳しく、露出度の高い服装での入場は禁止されていた。また、ワット・プラケオは人気の地であり、この日も非常に混雑している中、回廊の絵や金色の仏塔、アンコールワットの模型を見て回った。本堂の中では、安置されているエメラルド仏を見学した。王宮は外観の見学だけであったが、ラーマ 5 世が新しく建設したとされているチャックリーマハープラサート宮殿などを見て回った。



【勉強会との関連】

事前の勉強会では、ワット・プラケオは、1782 年にラーマ 1 世が王宮と、国家の行事をする寺院を建設した場所であり、広大な敷地にある仏塔には仏舎利が納められていることを学んでいた。また、アンコールワットの模型があり、クメール文化の影響を強く受けたタイの建築様式を見ることができ、本堂の中にはタイで最も重要な仏像であるエメラルド仏が鎮座していることを学習していた。しかし、実際に本堂に入ってみると、中はとても静かな空間で、想像していたよりも厳かな雰囲気の中にエメラルド仏は安置されていた。

【感想】

ワット・プラケオでは、その大きさや美しさに、到着して白い塀に囲まれた寺院や王宮を見た最初から門を出る最後まで圧倒された。特に印象に残っているのが本堂である。本堂に入った瞬間の表現しがたい雰囲気とその中に佇むエメラルド像は印象的であった。エメラルド像は思っていたよりも小さかったが、その存在感はとても大きかった。日本の寺院とは外観も雰囲気も全く異なり、日本では決して見ることのできないような豪華な外観の仏塔や王宮を見学し、その雰囲気を体感することができ、とても貴重な経験となった。

バンコク見学②(ワット・ポー)

1 年　瀬賀　隆慈

【日時】2018 年 8 月 11 日

【場所】ワット・ポー

【概要】
　バンコクで最大、最古の寺院でありタイの三大寺院の一つにも数えられるワット・ポーの見学を通じてワット・ポーの文化的・宗教的・歴史的な価値や意義を体感するとともに、当時のラタナコーシン王朝（チャクリー王朝）の繁栄や，ワット・ポーを象徴する涅槃仏の建設を指示したラーマ三世の信心深さを確認することができた。また、寺院を訪れる現地の巡礼者や，寺院に設けられた巡礼者に対する配慮を通してタイに仏教が深く根付いていることを再確認した。
【勉強会との関連】
　事前の勉強会ではワット・ポーを含めた三大寺院の概要について学んだ。ワット・ポーは約 80,000 ㎡の面積を有するバンコクで最大・最古の寺院であり、ワット・プラケオ、ワット・アルンとともにタイの三大寺院と並び称される。ワット・ポーを象徴する涅槃仏は全長 46m、高さ 15m という巨大さであり観るものを圧倒するような迫力と荘厳さを併せ持っていた。殿堂には 108 の鉢があり、それに一つずつ硬貨を入れることで煩悩を捨てることができるといわれている。また、タイ古式マッサージの総本山としても有名であり、敷地のいたるところに健康体操の姿勢を模した像が置かれているほか、敷地内にワット・ポータイ伝統医学学校というタイ式医療の学校が設置されている。
【感想】
　私たちはタイ遠征六日目の班別自由行動の際にワット・ポーを訪問した。寺院に入ってまず目についたのは寺院内に建てられた四つの巨大な仏塔だった。これはラーマ一世からラーマ四世を象徴しているといわれており、現在の人々だけでなく当時の人々にとっても国王は偉大な存在だったのだということに気づかされた。またワット・ポーに限らずタイの寺院には多くの巡礼者がみられ、盛んに参拝などを行っていた。逆に寺院側でも巡礼者しか立ち入れない領域を作る、ほかの訪問者が騒音を立てないように対策をするなど巡礼者に対する配慮がみられ、タイにおいて仏教がどれほど大切にされているかということをうかがい知ることができた。

バンコク見学③(ワット・アルン)

3 年　石田　龍

【日時】2018 年 8 月 11 日
【場所】ワット・アルン
【概要】
　タイにおける三大寺院のうち、「暁の寺院」の別名を持つワット・アルンの訪問により、その文化的価値と芸術的創造性、仏教思想を反映させた構造を実際に確認し、また中

央大仏塔に代表されるその大きさに、当時の権力者の権威とワット・アルンという建築物の持った象徴性を肌で感じることができた。また寺院に対するタイの人々の態度・外国人訪問者との比較を行うことで、タイに人々の信心深さを感じ、また文化の多様性の共生に必要なものについて考察する機会となった。

【勉強会との関連】

アユタヤ時代にワット・マコークという小さな寺院として建立され、1779 年トンブリ王朝のタクシン王がエメラルド仏を祀りワット・チェーン(夜明けの寺)と改名（のちのワット・アルン（＝暁）の由来)、第一級王室寺院となる。しかしチャクリー王朝となってからはワット・プラケオが第一級王室寺院となり、エメラルド仏も移される。中心にたつ大仏塔（仏舎利（＝釈迦の遺体・遺骨、またはその代替物）を安置した仏教建築）は高さ約 80 メートル、仏教が誕生した古代インドにおける世界観の中心、「須弥山」（しゅみせん）（＝世界の中心にあると考えられる想像上の山）をイメージしたものであり、その世界観は、塔の先端(窓部分)に見える三つの頭を持つエラワン象とインドラ神から確認することができる。その壮大さの持つ求心力・権威の象徴性は、情報社会に生き、様々な遺跡を画面上で見てきた自分に画面上のそれとは異なる権威を感じさせるものだった。三島由紀夫の『暁の寺』の題材にもなったことからもうかがえるように芸術性の高いワット・アルンであるが、ワット・プラケオが黄金をあしらったものであるのに対し、ワット・アルンは白地にモザイク装飾を施したものであり、寺院内の建築物がそれに統一されていることで、どの寺院とも異彩を放つものであった。そのことからも訪問者はタイ国外からの人々が多くみられた。

【感想】

かつてエメラルド仏の置かれていた寺院であることから、その壮大さや各所にみられる創意工夫、そして、何より須弥山をイメージして作られた大仏塔は仏教徒ではない私にもその文化的価値が明らかであったが、現在エメラルド仏の置かれているワット・プラケオと比較すると明らかに訪問者の種類が異なり、ワット・プラケオにおいては半数近くがタイの現地の人々であったのに対し、ワット・アルンはその大部分がタイ以外の国の人々であった。これにはワット・プラケオのもつ芸術的魅力以外にもエメラルド仏のもつ影響力とタイの人々の信心深さがうかがえ、固有の宗教を持たない自分にとって、宗教の個人に持つ影響力の大きさを肌で感じることができ、その多様性の尊重の重大さを痛感させられた。

バンコク見学④(国立博物館)

1年　本田爽馬

【日時】2018年8月10日（金）　9：00～11：00

【場所】 国立博物館

【概要】

国立博物館は1874年、ラーマ5世の治世に開かれたタイ国内最大規模の博物館である。1000点を超える美術品が所蔵されており、タイの文化史・美術史を年代ごとに見学することができる。また、もともとは、当時の副王の宮殿として利用されていたこともあり、所蔵されている品々だけでなく、建物自体にも博物的な価値を感じることができる。当日は、班別に行動をし、付き添いのガイドさんの説明を受けながら見学した。新石器時代の出土品やタイ伝統の人形劇の展示から王族の装飾品などがあり、太古から現在に至るまでのタイの歴史文化を感じる貴重な機会となった。

【勉強会との関連】

事前の勉強会では、前述したような国立博物館の成立背景や特徴、見学すべき展示品などについて学習した。国立博物館の一部が改装中で入れなかった場所があったものの、勉強会で学んだ展示品について触れた際には、あらかじめ知識を持った上で見学できたことで、より実りある見学となった。また、勉強会では、現地の日本人による日本語ガイドツアーの存在についても触れていたが、曜日の関係で実際にツアーに参加することはできなかった。

【感想】

国立博物館に到着してすぐに、正面にあるタイの様式で造られた壮大な建物に圧倒された。白塗りの壁に金で装飾された屋根の建物は、豪華絢爛であり、副王の宮殿として利用されていたことを実感させられた。私が事前勉強会の中で特に興味を持ったのは、ラームカムヘーン大王碑文という13世紀のもので、平易な文章が書かれていることからタイ国内で国語教材としても利用されている碑文である。実際にこれを見学した際には、街で見かける文字と同じような文字が記されていて、タイでは昔から今に至るまで文字の変化がほとんど見られないという事実を改めて認識した。また、タイでは日本以上に仏教が盛んであり、仏教に関する多種多様な展示物の中には、日本では見られないようなものもあり、見知った光景の中にどこか新鮮さを感じることもあった。世界史や事前勉強会の中で学んだ知識を、現地で、歴史的価値のある展示物を通して再確認できたという経験はとても貴重であり、その中で多くのの発見も新たにすることができ、とても有意義な時間であった。

写真：ラームカムヘーン大王碑文

アユタヤ見学①(ワット・ヤイ・チャイモンコン)

2 年　　青木漱介

【日時】2018 年 8 月 8 日
【場所】ワット・ヤイ・チャイモンコン
【概要】

遠征３日目となるこの日は、快晴に恵まれ、朝からバスでアユタヤへ向かった。２時間ほどかかる予定だったが、渋滞に巻き込まれずに済んだおかげか、１時間ちょっとくらいでアユタヤに到着した。アユタヤで最初に赴いたのはワット・ヤイ・チャイモンコンという遺跡。到着後、30 分ほどの時間が設けられ、主に班ごとに遺跡を見学した。この遺跡は階段で登ることができるようになっており、登った先の室内には金色の仏像が円になって並んでいた。部屋の中心には井戸のような形をした賽銭箱があり、下を覗いてみると底がとても遠く感じられた。その部屋の隣には開けた空間があり、アユタヤを高い位置から展望することができた。

【勉強会との関連】

アユタヤについての事前勉強会では、アユタヤ朝の歴史や文化、現在のアユタヤ遺跡についてなどを学習していた。ワット・ヤイ・チャイモンコンについては、1357 年に作られ、アユタヤ朝の遺跡の中でも特に長い歴史を持っており、高い仏塔で知られていることなどを写真とともに学習していた。また、勉強会の中では、アユタヤ朝とそれ以前に存在していたスコータイ朝の遺跡の違いなどについても考察していた。スコータイ朝とは違い、アユタヤ朝はビルマ軍のからの激しい攻撃によって滅亡したため、アユタヤ朝の遺跡には随所に戦闘の激しさが感じられる部分がある。当遺跡においても、頭部や腕の欠けた仏像、一部が崩壊している城壁などがみられ、事前に勉強していたものを実際に感じることができた。

【感想】

事前勉強会で写真や遺跡の基本情報については学んでいたものの、実際に目にした時の迫力は表現しがたいものがあった。遺跡の至るところに石像があり、遺跡自体はレンガ造りで、見上げるほど巨大な建築物であった。少し急な眺めの階段を上った先には仏像の並んだ部屋があり、外にある石像とは異なる金色の仏像も非常に美しかった。部屋を出た先の展望デッキのような場所では、360 度景色を眺めることができ、この日の快晴と相まっ

て非常に素晴らしい景色を眺められた。遺跡全体として、巨大で神秘的であり、ずっと眺めていても退屈しないような場所として感じられた。

アユタヤ見学②(ワット・マハタート)

2 年　安達優佳

【日時】2018 年 8 月 8 日
【場所】ワット・マハタート
【概要】
　ワット・ヤイ・チャイモンコンを見学したのち、同じくアユタヤ屈指の遺跡の一つであるワット・マハタートへ向かった。ワット・マハタートは 14 世紀後半のアユタヤ王朝初期に建立されたものの、建立者については複数の学説がある謎多き寺院である。特に有名な木の間に埋まった仏像の頭は、落下したとある仏像の頭部が、奇跡的に水平を保った状態で木の中に取り込まれたという、驚異的な自然の芸術である。
【勉強会との関連】
　アユタヤ王朝は 400 年以上も続いた長期的な王朝であったが、1760 年ころから始まったビルマとの戦い(泰緬戦争)に敗れ、滅ぶこととなった。泰緬戦争は非常に激しい戦争で、これによりアユタヤは壊滅的な打撃を受けた。ワット・マハタートも他の寺院と同様にビルマ軍に破壊され、かつての巨大で優美な姿は見られなくなってしまった。アユタヤ王朝の歴史、ビルマ軍との戦争、遺跡などの勉強は十分に行ってからタイへ行ったものの、百聞は一見に如かずとはよく言ったもので、実際に見ることでしか得られない気づきや感覚を得ることができた。寺院内に並んだ首から上のない仏像たちは、250 年ほど前の戦争の激しさ、悲惨さをどんな文章や映画よりも直接的に語りかけてきた。

【感想】

かつて長期にわたり繁栄したアユタヤ王朝の寺院が、戦争を経て、当時の様相とはかけ離れた姿になってしまったことは、非常に悲しいことであると同時に、人類の教訓となるようなメッセージ性の強いものであった。熱心な仏教国家であるタイの人々にとって、首の無い仏像をそのままにしておくことには抵抗があったそうだが、それでもこの姿を残すことに意味があるという考えのもと改築は行っていないという。また、木に埋まった仏像の頭の前で写真撮影する際、その頭より自分たちの頭が高くならないよう、座って写真撮影しなくてはならない、という決まりも、タイの人々の信心深さを表す１シーンであると感じた。

アユタヤ見学③(ワット・プラ・シー・サンペート)

１年　小俣　淳平

【日時】2018 年８月８日

【場所】ワット・プラシーサンペット

【概要】

班別でアユタヤ王朝の３人の王（トライローカナート王、ボーロマラーチャーティラート３世、ラーマティボディ２世）の遺骨が３基の仏塔にそれぞれ納められた遺跡を見学し、アユタヤ朝の文化や戦争の痛々しさを感じ、また現在のタイの教育を垣間見ることもできた。当時この地には王宮が建設されており、このワット・プラシーサンペットは王宮の寺院として重要な役割を果たした。仏塔の東側に寺院が存在していたが、1765 年から２年間に及ぶビルマとの戦争により寺院はことごとく破壊された。しかし、戦後に修復作業が行われ、黄金の仏像なども復元された。現在は寺院としてではなく、遺跡として世界遺産に登録されている。

【勉強会との関連】

事前の勉強会では、歴史文化研究班を中心にアユタヤ朝についてや個別の寺院についても学習していた。アユタヤ朝は 1351 年にチャオプラヤ川下流に建国された港市国家であり、17 世紀には国際商業の中心地として栄え、日本人町も形成されたが、18 世紀にビルマを統一したコンバウン朝に侵攻され滅亡した。その際に多くの寺院が破壊されたということは事前に学習していたが、実際に見てみるとその荒廃ぶりは想像を超えたものであった。

【感想】

戦争で破壊されかけたということもあり、遺跡に多くの修復痕が見受けられたり 3 基の仏塔以外の建物がほとんどなかったりと二重三重に歴史の重みを感じさせる場所であった。タイ史上の重要な拠点という意味で大きな歴史的価値を包含していることはさることながら、3 基の仏塔と周辺の荒れた遺跡は芸術的にもその価値を大いに感じさせた。

王の墓の遺跡は世界に数多く存在するが、この遺跡はピラミッドや古墳というよりはタージマハルや東照宮に近いのものを感じた。というのもこの墓は大きさではなく造形美を意識して建設されているのである。このような墓による主張の違いは王の人格や時代背景を理解するうえで重要な役割を果たすのではないだろうか。

遺跡見学には現地の小学生や兵役中の軍人たちも訪れていた。ガイドの方によると座学のみではなく、実際に遺跡や王宮などを見学することが学校教育や軍隊の教育で定められているそうだ。タイ人に愛国者が多いのもこのような教育の成果なのかもしれない。

Ⅲ. 班別行動報告

班別行動①(タリンチャン水上マーケット)

2年　柿原優衣

【日時】2018/8/11
【場所】バンコク/タリンチャン水上マーケット
【概要】

タリンチャン水上マーケットは土曜日曜にだけ開かれる、比較的ローカル色の強いマーケットである。しかし、もともとは文化保護と観光客誘致の目的で作られたものである。船乗り場に行くまでの間には多くの露店があり、鮮やかな果物や野菜などが売られていてとても賑やかだった。時間が早かったのか、桟橋の周りに停泊する専門屋台の小船から食べ物を注文する言わば水上レストラン方式とはいかなかったものの、船に乗って川を巡り、住民の生活を垣間見ることができた。(写真参照)

【勉強会との関連】

水上マーケット(フローティングマーケット)はずっと昔から運河の上や、運河の近くに住むタイの人々の生活の一部として存在していた。時を重ねるに従い近くに住む人々以外にも知り渡れるようになり、現在では海外からの旅行者にも知られるタイを代表する観光地となった。実際に、客は外国人がほとんどだった。

右の写真のように小舟でその場で料理を作り、売る形式である。

タイという国が近代化へのターニングポイントを迎える1860年頃（日本は丁度その頃幕末）まで、タイにおける街づくりは周囲を運河で仕切り、「島」のような市街の中で都市計画を図るのが主流だった。

これは、日本で言うところの城を掘で囲むことと同じ発想だと言われている。防衛力を高め、外敵の侵入を難しくしていたのだ。

次々と運河を整備していく過程で、当時は今ほどに陸地が整備されていなかったこともあり、人々にとっての移動の足は水上交通が主になっていった。

こうして、商人達は自身の船に売り物を積み、各場所で売り渡ることを覚え生計を立てるようになったのだ。

【感想】

日本にはないような形態のマーケットだと聞いていたので、とても興味深い視察でした。川を船で巡っていると多くの寺院、修行する僧、鯉に餌をやる住民などが見られてとても間近に市井を感じました。ガイドさんがとても丁寧に市井の生活などについて説明してくださり、勉強にもなりました。

川から見える家にはどれも足がついていて、土地の高低差が少ないがために一度洪水が

起こるとなかなか水が引かないタイならではの工夫だと思われました。日本と違う気候や土地柄に応じた生活を見ることができ、タイの視察の中で重要な一ページとなりました。

↑船乗り場までの露店

↑乗った船

↑垣間見えた市井の生活

班別行動②（シーロム通り周辺）

2 年　田北美樹

【日時】2018 年 8 月 7 日 17:15～18:20
【場所】シーロム通り周辺
【概要】

日本人会館本館で行われた如水会バンコク支部交流会の前に BTS チョン・ノンシー駅付近、シーロム通り周辺で 1 時間ほど班別行動の時間が設けられた。シーロム通りとはルンピニー公園から南西に延びる通りである。高級ホテルやレストランが点在する近代的なオフィス街ながら、夜になると露店や屋台が並び、繁華街となる。一日中活気に満ちたタイ経済の中心地である。ルンピニー公園はラーマ 6 世が王室所有の土地を提供してできた公園でバンコク最大の広さ 57.6ha を誇る。ビジネス街の中にワット・プラ・シー・マハー・ウマー・テウィーというヒンドゥー教の寺院も存在する。入り口には無数の神像が彫られた極彩色の門がそびえ立つ。通りには他に約 250m の間に無数に露店が立ち並ぶ、バンコクを代表するマーケットのひとつであるパッポン・ナイト・バザールがある。このように大変発達したビジネス街の中に自然の空間、文化的な寺院、タイらしいマーケットなどがある熱気溢れる街である。

ここでは班別に行動し、マーケットでタイ土産を購入したり、屋台の食べ物を食べ歩きしたり、大きなショッピングモールを散策したりと、シーロム通りならではの多様な体験を

することができた。売っている食べ物はドリアンやンゴ、マンゴスチンなどの南国フルーツやタイ料理といった、日本ではなかなか食べることのできないものであった。マーケットでの買い物は値下げ交渉が基本で最初の提示価格の半額以下で買得ることもある。日本で値下げ交渉をする機会はなかなかないので貴重な経験をすることができた。マーケットや屋台で売っている雑貨屋食べ物は日本と比べ物価が安かった。対して大きなショッピングセンターでは日本とあまり変わらない商品が変わらない価格で売られていた。レストラン街には日本のラーメン屋や定食屋、日本料理店が多く、日本語表記も沢山見かけた。

【感想】

短い時間ではあったが近代的なショッピングモールや企業のビルが立ち並ぶ中で、タイならではの屋台やマーケットが存在するような日本には無い雰囲気を楽しむことができた。日本でタイ語を見かけることはほとんど無いが、タイでは日本語を読める人は少ないだろうに日本語表記が沢山存在する点が大変興味深かった。また数年後に訪問し、タイの文化を残しつつ、まだまだ発展していく様子を見てみたいと思った。

班別行動③

1年　藤山奈々子

【日時】2018年8月11日（土）15：00～21：00

【場所】サイアム地区、ワット・アルン

【概要】

遠征6日目、最終日のこの日はワット・プラケオ、ワット・ポー、ワット・アルンのタイの三大寺院を見学した後、班別の自由行動の時間がもうけられた。我々の班は一度バンコクの中心部に行きサイアム地区で買い物と散策をした後、三大寺院があるエリアに戻り、チャオプラヤ川をはさんでワット・アルンの対岸に位置するレストランで夕食を食べ、これを班別行動の締めくくりとした。

サイアム地区とは、首都バンコクの中心となる地区でサイアム・スクエアという繁華街やサイアムセンター、MBKセンターといった大型ショッピングモールを有している商業の盛んな地域である。この地が発展したのには、今回交流したチュラロンコン大学が関係しているといわれている。というのも、同大学は王の所有物でありかつタイの最高学府であるため最も権威ある大学とされ、その隣地という好条件に惹かれ多くの商人が店を出し、また大学があるおかげで若者が多くいるため文化や流行が生まれやすかったのだ。我々が散策したとき

にはナイトマーケットが開かれており民芸品から食べ物まで多くの種類、数の露店が軒を連ねていた。事前に現地の方からタイでは夕食は家では作らず外食する家庭が多いと聞いていたのだが、その通り、食事のできるスペースでは多くの家族連れが夕食を食べている光景を目にした。

【感想】

サイアム地区が発展した商業地区だという事実自体は事前の学習で知っていたが、街の空気や匂い、ひとの活気などは実際に訪れて初めてわかったものであったしこれを言葉で説明しても正確には伝わらないように思う。また日没前、日没時、日没後のワット・アルンの荘厳さには言葉を失うほどの感動を覚えた。こうした肌で実感することに価値のある貴重な体験ができたことを誇りに思うとともに、今回このような機会を与えてくださったすべての方々に感謝をしたいと思う。

班別行動④

1年　山本真由

【日時】　８月１１日（６日目）　15時～21時

【場所】　シーロムコンプレックス、ラチャダー鉄道市場、ＭＢＫセンター

【概要・感想】

まずワット・アルンからすぐ近くのお店でパッタイを食べた。醤油のような日本人好みの味付けで食べやすくとても美味しく食べることが出来た。

その後駅まで移動するためにタクシーを利用した。事前の勉強会でタイのタクシーは必ずメーターがあるものを使用するべきで、ピンクのタクシーが一番安全であると聞いていたので二手に分かれてそれで移動した。

はじめに行ったのはシーロム駅から直結している、シーロムコンプレックスである。ここはバレー部 OB の麻植さんから頂いた『タイ 中進国の歴史』という本にも載っていた場所でタイの発展を象徴するような複合型のショッピングセンターである。ここでは DAISO や無印良品など日本でよく見かけるお店も溢れており、パッケージがタイ語ではなく日本語のままの商品も数多く見られ、日本ではあまり見られない光景だと思った。

次に電車で移動し、タイ文化センター駅で降りてラチャダー鉄道市場に行った。ここは駅からすぐの広場のような場所に沢山の屋台や出店が出ている場所であり、手前半分は食品、奥半分は雑貨や衣類などで分かれていた。17 時から営業開始となっていたので私たちは 17 時半くらいに着いて行ったのだが、半分くらいの店は開店前であり開いている店もまだ準備の途中というところが多く、タイの方々の時間感覚のゆったりさを感じた。日本では営業時間を守らないお店は少なく、日本人は常に時間に追われているのでタイの方々の時間の流れはとても羨ましく感じられた。

次にサイアム駅に戻ってご飯を食べた。その後歩いてナショナルスタジアム駅の近くにある MBK センターへ行き、Tops market というスーパーでタイにしかない食べ物やタイではとてもポピュラーな果物であるマンゴーやパパイヤのドライフルーツなどを購入した。

【勉強会との関連】

勉強会では多くの日本企業がタイに進出していたり、空港や橋の建設なども日本がお金を出しているということを学んだが、今回の班別行動でタイにはセブンイレブンや DAISO など日本の店が多く出店しているということに気がついた。『タイ 中進国の歴史』の本にもあったことだが、タイは世界で 4 番目のセブンイレブンの店舗数を誇っているだけあって至る所でセブンイレブンが見受けられた。

Ⅳ. 全体感想

全体感想①

3年 山田 真由

今回のタイ遠征はタイの経済発展のダイナミズムや独立を守り続けたタイの歴史文化を学ぶとともに、チュラロンコン大学の学生や如水会バンコク支部の方々との国際交流を深めることをテーマとして実施され、非常に充実した7日間を過ごすことができた。中でも日本大使館と企業訪問、如水会バンコク支部との交流夕食会、アユタヤ見学を通じて得た学びが大きかった。

日本大使館の訪問ではタイについての政治、経済状況や日本との関係について詳しい話を伺い、日本の皇族とタイの王族が緊密な関係を築いていることや、日本とタイが戦略的パートナーシップを構築していることなどを学んだ。また外交官という仕事そのものについてのお話も伺うことができた。JETROバンコク支部ではASEAN地域の多様性が経済にもたらすメリット、デメリットやタイ経済の特徴、中所得層の罠を乗り越えるためのプランについて問題点も踏まえた話を隣国ラオスとの比較も交えながら聞くことができた。事前の勉強会では触れていない話も多くあり大変有意義な時間であった。タイトヨタ訪問では実際に生産ラインの見学をさせていただき、どのようにトヨタ生産システムを実現しているのか間近で見ることができた。これらの企業訪問では活発な質疑応答を行うこともでき、事前勉強会の成果を出せたと思う。

交流夕食会は25名に及ぶ如水会バンコク支部の方々に参加いただき非常に賑やかな会となった。学生時代の話から仕事、現地での生活の話まで様々なお話を多くのOBの方々とすることができた。海外で活躍されている一橋大学のOBの方々と交流できる機会は滅多にないことなので大変貴重な時間を過ごすことができたと思う。

アユタヤの遺跡は非常にユニークなものが多く、チャオプラヤ川流域での交易によって様々な文化の影響を受けながら独自の文化を形成してきたアユタヤ朝の歴史を感じることができた。また破壊されている遺跡も多く、アユタヤ朝滅亡の要因であるビルマの攻撃の激しさも垣間見ることができた。勉強会でアユタヤについて学んではいたが、実物の遺跡群は写真で見た以上に壮大で非常に印象的であった。

今回の遠征ではトップレベルの企業の方のお話を伺う中でタイの経済についての知見を深め、またアユタヤ見学を通じてタイの歴史文化の理解を深めることができた。これは海外遠征だからこそなし得た経験であると思う。最後になるが、この有意義で貴重な経験をすることのできた背景として如水会、一橋大学バレーボール部OBOG会、現地企業やチュラロンコン大学の学生の方々の多大なる支援があったということを理解し、深く感謝するとともに、今回の経験を活かして社会人として活躍し、後輩への支援を行うことで恩返しをするという遠征本来の目的も達成することができるよう今後も学ぶ姿勢を大切にしていきたい。

全体感想②

2年　田中　裕章

今回のタイ遠征は、日本と経済的にも密接な関係にあるタイとの国際交流及びタイの歴史・経済を学ぶことを目的としたものであり、非常に密度の濃い7日間だった。

まずタイで医療機器などを輸入しているEMINENCEという企業を訪問した際にはタイの医療機器市場について、また医療機器市場における日本とタイの関係について学ぶことができた。EMINENCEの方のお話を聞いていると、お互いに少子高齢化が進んでいる日本とタイはこれからより一層協力していかなければならないと感じた。

チュラロンコン大学との交流試合では、チュラロンコン大学の選手のレベルの高いプレーを見て多くのことを学べた。チュラロンコン大学の選手のサーブやスパイクはとても力強く、今の自分たちに足りないものを実感できた。チュラロンコン大学との交流試合が、これからのリーグ戦で４部優勝、３部昇格するための大きな足がかりとなると思った。また１，２年生、女子部にとっては初めて海外の大学とバレーボールの試合ができ、貴重な経験となった。

討論会においてはチュラロンコン大学の学生と班ごとに分かれ性の多様性について英語で討論を行った。Sexual minoritiesに対してタイと日本では現在どのような認識がされているのか、また法整備は進んでいるのか、どうすればsexual minoritiesも幸せに生きていけるのかなどについて意見を交換した。チュラロンコン大学の学生と一橋大学の学生ではsexual minoritiesに対して着目する点も少々異なっていて興味深かった。チュラロンコン大学の学生によって新しい視点の考え方が提示され、それによって議論が深まり、どの班でも討論会は大いに盛り上がった。海外の学生と英語で討論する機会はめったにないので貴重な体験となった。また海外の学生とより深い討論を行い、意見交換をするためには、もっと英語力を身につけなければならないと改めて感じた。今回の討論会は多くの面で良い刺激となった。

チュラロンコン大学との懇親会は両大学の選手やマネージャー、OBの方など非常に多くの人が参加し盛大に行われた。お互い緊張することなく気軽に話し合い、交流を深めた。懇親は賑やかに進み、お互いの文化や言葉を紹介し合った。海外の大学にも多様な人々がいると改めて実感した。

今回の遠征でタイの歴史文化・経済への理解を深めるとともに様々な企業への訪問やチュラロンコン大学との交流など海外遠征でしか成しえない貴重な体験ができた。如水会やOB会、訪問先企業やチュラロンコン大学の方々に深く感謝するとともに、この経験を様々なところで活かしていきたい。

Ⅴ. 如水会タイ支部
訪問報告

如水会バンコク支部夕食会

4年　住吉瑞基

【日時】2018年8月7日（火）

【場所】日本人会館本館・大会議室

【概要】

“経済訪問”をテーマとした2日目最後のスケジュールは、今回のタイ遠征において多大なる力添えをして頂いた如水会バンコク支部の方々との交流会であった。我々バレーボール部員が総勢41名に対し、タマサート大学にて留学をされている加茂さんを加えた、計25名もの会員の方々に出席をして頂いた。最初にバンコク支部長を務められる中川さん（1978年卒、商学部、Energy Pro Corporationにご所属）から歓迎の挨拶を頂き、その後、最年長であられる服部さん（1965年卒、商学部）が乾杯の音頭をして下さり交流会が開始した。しばし部員と会員の方々で歓談を行い、今回初めて如水会バンコク支部の交流会に参加された方などから順に挨拶をして頂いた。その後はバレーボール部の紹介へと移り、遠征担当の渡邉、OB の宗田さんと安西さんの順で挨拶を行った。最後に主将平林による決意表明、バレーボール部OBでタイ味の素にて勤務されている渡辺さん（1990年卒、商学部）からのご挨拶、そして現役を代表して1年の本田が気迫十分のエールで締め、交流会は無事に終了した。

【勉強会との関連】

経済分野の事前研究で、タイは日本に必要不可欠なパートナー国であると学んでいたが、その場では貿易額などあくまで数字面での話に過ぎなかった。だが実際にタイに進出されている日系企業で働かれている方、またはタイで起業をされている方の現地でのお話から、改めて日本経済にとってタイは重要な地域になると感じられた。

【感想】

間違いなく、如水会という繋がりが無ければ伺えなかった貴重なお話ばかりであった。特にインフラ系や食品系メーカーの存在感が、日本と比較してタイではかなり大きいというのが、お話を伺う中で印象的であった。また日本以外の場所でもこうした大学の縦の繋がりがあることは、現役の我々にとって非常にありがたいものだと実感した。海外でビジネスに励む先輩方から、多くのことを学ぶことが出来た貴重な経験であった。

↑如水会タイ支部での写真

VI. 事前学習

事前学習(『タイ　中進国の模索』)

1年　左右田航

今回の事前学習で学んだことはタイが中進国になるまでの過程と、これから先進国になるためにすべきことである。中進国という単語は聞き慣れないものであったが、この機会を通じて上位中所得国(1人あたりGDPが3036～9385ドルの国)のことを指すことがわかった。タイは1988年から未曾有の経済ブームを経験し、その証拠にバンコクでは高層ビルの建設ラッシュが起きていたという。その大きな成長も1997年のアジア通貨危機を経て止まってしまうことになった。著者の末廣氏は、タイが更なる成長を遂げるにはグローバル化や自由化の波にタイ社会を自ら適合させていく「タイ王国の現代化」と、王制と仏教を軸に社会の公正や安定を重視する「タイ社会の幸福」のどちらかの選択が必要だと語っている。

実際にタイで学んだのは、中所得の罠である。タイは中進国になってから著しい経済の発展はなく、先進国への仲間入りする事ができないでいるのである。実際、タイの1人当たりのGDPは1990年代には中国やマレーシアのものとほぼ同じであったのに10年ほどで大きな成長をする2国に大きな遅れを取るようになったのである。この状況を打開するためにタイランド4.0という政策が進められている。タイでの今までの成長の段階は順に1.0(農業)、2.0(軽工業)、3.0(重工業、海外からの直接投資)に分けられている。タイランド4.0で目指すのは次の段階である4.0(産業の高度化、高付加価値化)である。この政策は農業にもしっかり目を向けつつ中小企業への積極的な援助等の施策を実施して3～5年以内で遂行される予定だという。バンコク市内を歩いていて特に印象に残ったのは、日本と少し異なる街並みである。事前に学んでいた通り高層ビルの数が多かっただけでなく、21世紀に建設されたであろうお洒落なビルが多かった。テトリスのようなもの、少し傾いたものが多く見受けられ、夜もバンコクの中心部は明かりが輝いており、タイが経済発展途中であることを匂わせるようであった。また、街の至る所で国王の写真を見る事が出来た。タイでは不敬罪に注意しなくてはならないことは事前に勉強会で学んでいたが、不敬罪が存在するほど国王が愛されているということをよく理解する事が出来た。

末廣氏は結局、タイは「現代化への道」と「社会的公正の道」を折衷した道を歩むべきだと語っているが、私も全く同じ意見である。実際に現地で国王への国民の愛、多くの寺院を見てこの文化を絶やしてはならないと感じた。大事なのは、タイの素晴らしい文化、国民の思いを残しつつ先進国の知恵を取り入れる方法を模索しどちらの道に比重を置くかを考える事だと思う。

Ⅶ. 参考資料

2018年4月10日

2018年度海外遠征計画書

一橋大学体育会バレーボール部

１.これまでの海外遠征
2010年度　豪州、2012年度　中国、2014年度　シンガポール、2016年度　台湾

２.2018年度海外遠征先
　タイ王国

３.海外遠征参加者
・4年生　　5名
・3年生　11名
・2年生　11名
・1年生　約12名の予定
・引率OB　1名
合計40名（※加入する新入生の人数により多少の増減あり）
※氏名等の詳細は添付別紙の通り

４.交流先
チュラロンコン大学　(Chulalongkorn University　=CU)
バレーボールクラブ

５.宿泊先
チュラロンコン大学　大学寮Chuan Chom/Wittayanivej
(254 Phayathai Rd,Khwaeng Wang Mai,Khet Pathum Wan,Krung Thep Maha Nakhon 10330)

６.実施年月日
2018年8月6日（月）～8月12日（日）の　6泊7日を予定。

７.日程表・タイムテーブル

1 日目（8 月 6 日　月曜）

7:20　成田空港集合
9:25　成田空港出発
12:10　台北桃園空港着、乗り継ぎ
13:35　台北桃園空港出発
16:20　バンコク スワンナプーム空港着
18:30　大学寮チェックイン

2 日目（8 月 7 日　火曜）

8:20　大学寮発
9:00～10:20　日本大使館訪問
11:00～12:00　JETRO バンコク支部訪問
13:30～15:30　タイトヨタ BANPHO 工場見学
19:00～21:00　如水会バンコク支部交流会

3 日目（8 月 8 日　水曜）

9:00　大学寮発
11:00～11:30　ワット・ヤイ・チャイモンコン見学
13:00～13:40　ワット・マハタート見学
14:00～14:30　ワット・プラ・シー・サンペット見学
14:40～15:10　象乗り体験
17:00～20:00　アジアティーク・ザ・リバーフロント見学

4 日目（8 月 9 日　木曜）

8:30　大学寮発
10:00～13:00　EMINENCE 訪問
14:00　大学寮着
15:00～19:00　CU と交流試合
20:00～22:00　CU と懇親会

5 日目（8 月 10 日　金曜）

8:00　大学寮発

9:00～11:00　国立博物館

14:00　大学寮着

15:00～18:00　CU と交流試合

18:30～20:30　CU と交流討論会

6 日目（8 月 11 日　土曜）

7:30　大学寮発

8:30～10:30　タリンチャン水上マーケット

11:30～ ワット・プラケオ

13:00～ ワット・ポー

14:00～ ワット・アルン

15:00～21:00　班別自由行動(21:00 には大学寮集合)

7 日目（8 月 12 日　日曜）

5:00　大学寮チェックアウト・出発

6:30　バンコク スワンナプーム空港着

8:35　バンコク スワンナプーム空港出発

13:15　台北桃園空港着、乗り継ぎ

14:40　台北桃園空港出発

18:55　成田空港着

解散

交流日程

8/9(木)			8/10(金)		
時間	内容	場所	時間	内容	場所
15：00	到着	体育館	15：00	到着	体育館
15:15～15:30	開会式		15：10～15：50	アップ	
15:30～16:15	アップ		16：00～17：15	第三試合	
16:30～18:00	第一試合		17：15～18：00	第四試合	
18:00～19:00	第二試合			移動	
	移動		18：40～19：00	イントロダクション	教室
20:00～22:00	懇親会	レストラン	19：00～20：30	ディスカッション	
				移動	
			21：00～22：00	夕食	レストラン

交流の主なタイムスケジュールは以上の通りです。
以下、試合や討論会、夕食について補足説明いたします。

・試合について(8 月 9 日、10 日)
第一試合～第四試合
第一試合、第三試合はレギュラーメンバー(5 セットマッチ)
第二試合、第四試合は新人(1・2 年生)を中心としたベンチメンバー(3 セットマッチ)
これらの試合は全て時間と試合進行により変わることがあります
可能であれば女子の試合を一試合(1 セットマッチ)やります

・討論会について(8 月 10 日)
18:40~19:00 自己紹介・イントロダクション
19:00~19:30 各班で討論
19:30~20:00 各班で討論結果発表
20:00~20:30 発表に対しての意見や質問を全体で話し合う

一橋大学バレーボール部 第5回海外遠征(タイ) 収支報告書

2018年8月31日作成
会計担当:旭、 渡邊
換算率 1円＝0.2975B

	【収入の部】				
	項目	単価(円)	数	金額(円)	備考
1	OBOG会支援金			1,320,000	追加支援分も含む
2	如水会国際交流助成金			1,000,000	金額は未確定(OBOG会が立替)
3	参加者個人負担金	50,000	39	1,950,000	
4	利息			3	銀行預金利息
	収入合計			**4,270,003**	

	【支出の部】				
	項目	単価(円)	数	金額(円)	備考
1	飛行機代			2,528,454	振込手数料を含む
2	宿泊費			344,873	大学寮 THB-102,600
3	海外旅行保険料			82,800	
4	現地交通費等			731,385	貸切バス手配代理店、ラビットカード
5	CUとの交流会費			31,042	1日目5,975B 2日目3,260B
6	如水会夕食会費			50,000	
7	現地訪問贈答品費			37,300	
8	その他雑費			118,247	Wi-Fi,携帯電話レンタル代、チップ等
	支出合計			**3,924,101**	

	収支(次回への繰越金)			**345,902**

収支報告書

参加者名簿

	学年	学部	名前	フリガナ
1	4年	商	相川 泰輝	アイカワ タイキ
2	4年	社会	栗本 寛久	クリモト ヒロヒサ
3	4年	社会	住吉 瑞基	スミヨシ ミズキ
4	4年	法	平林 凜太郎	ヒラバヤシ リンタロウ
5	4年	経済	和地 由布奈	ワチ ユウナ
6	3年	社会	石田 龍	イシダ リョウ
7	3年	法	今井 優貴	イマイ ユウキ
8	3年	社会	笠原 凜太郎	カサハラ リンタロウ
9	3年	経済	阪口 雄基	サカグチ ユウキ
10	3年	社会	比氣 朋訓	ヒキ トモノリ
11	3年	法	吉田 陽	ヨシダ アキラ
12	3年	経済	吉田 大介	ヨシダ ダイスケ
13	3年	商	渡邊 雄貴	ワタナベ ユウキ
14	3年	社会	渡部 龍生	ワタナベ リュウセイ
15	3年	商	旭 麻衣	アサヒ マイ
16	3年	商	山田 真由	ヤマダ マユ
17	2年	商	青木 漱介	アオキ ソウスケ
18	2年	法	多田 友之介	タダ ユウノスケ
19	2年	法	田中 裕章	タナカ ヒロアキ
20	2年	経済	塚田 源	ツカダ ハジメ
21	2年	商	南 新八	ミナミ シンヤ
22	2年	商	柿原 優衣	カキハラ ユイ
23	2年	社会	炭本 奈都子	スミモト ナツコ
24	2年	商	玉木 里奈	タマキ リナ
25	2年	法	安達 優佳	アダチ ユカ
26	2年	商	田北 美樹	タキタ ミキ
27	2年	経済	中村 優	ナカムラ ユウ
28	1年	商	小俣 淳平	オマタ ジュンペイ
29	1年	法	シモン ナイ	シモン ナイ
30	1年	経済	瀬賀 龍慈	セガ リュウジ

31	1年	商	左右田 航	ソウダ ワタル
32	1年	商	田中 佑弥	タナカ ユウヤ
33	1年	社会	林 慎太郎	ハヤシ シンタロウ
34	1年	法	本田 爽馬	ホンダ ソウマ
35	1年	商	今村 遥香	イマムラ ハルカ
36	1年	法	藤山 奈々子	フジヤマ ナナコ
37	1年	商	山本 真由	ヤマモト マユ
38	OB	ー	宗田 雅彦	ソウダ マサヒコ
39	OB	ー	中島 孝	ナカジマ タカシ

討論会プレゼン資料

What should we do
in order for many people
including sexual minorities
to live happy lives？

Hitotsubashi University Volleyball Club
Junior, Tomonori HIKI / Sophomore, Natsuko SUMIMOTO

Flow of Presentation

- an outline of sexual and gender diversity
- the legal systems about same sex marriage in Thailand and in Japan
- our opinion of this theme

What should we do
in order for many people
including sexual minorities
to live happy lives？

What do you think this means？

$$\frac{1}{13}$$

The answer is ….

the ratio
of sexual minorities
in Japan

The ratio of sexual minorities in Japan

$$\frac{1}{13} \fallingdotseq 7.6\%$$

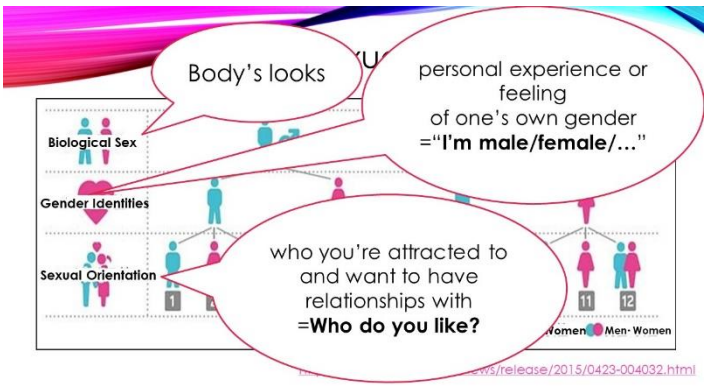
What is a "sexual minority" ?

a group whose biological sex,
gender identity, or sexual orientation
differ from the majority
of the surrounding society

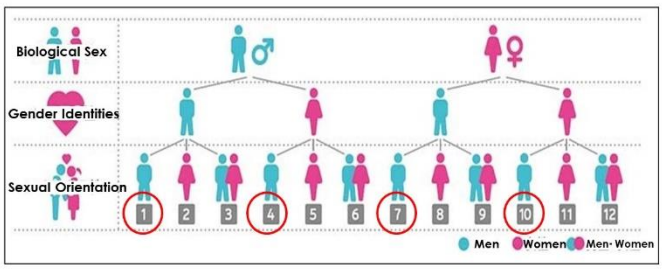
Biological sex = gender identity
&
Love the opposite sex

What is important ?

What you feel about your gender > Your looks

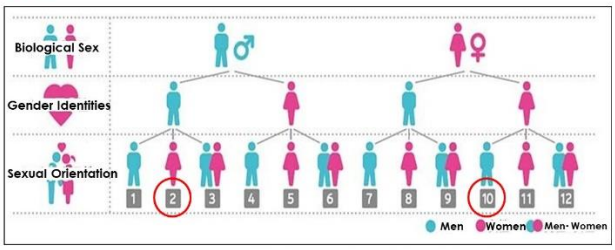


Sexuality Map



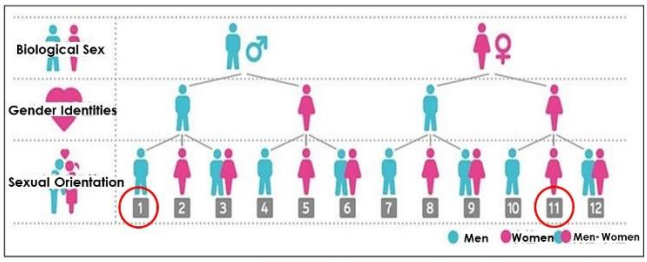
http://www.dentsu.co.jp/news/release/2015/0423-004032.html

Sexuality Map -- Majority



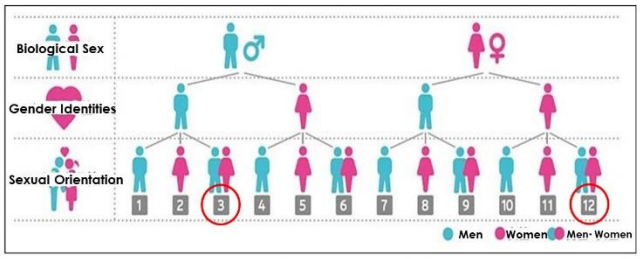
http://www.dentsu.co.jp/news/release/2015/0423-004032.html

Sexuality Map -- Gay/Lesbian



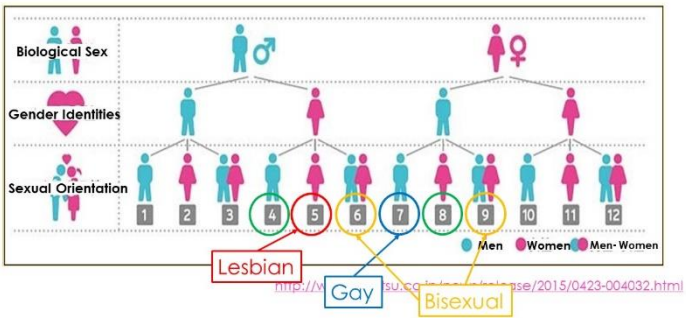
http://www.dentsu.co.jp/news/release/2015/0423-004032.html

Sexuality Map -- Bisexual



http://www.dentsu.co.jp/news/release/2015/0423-004032.html

Sexuality Map -- Transgender



http://www.dentsu.co.jp/news/release/2015/0423-004032.html

the legal systems

in Thailand

- Same sex marriage is not legally acknowledged.

↕

- It doesn't matter for some people who think an official marriage is important.

in Japan

- The partnership policy acknowledges same sex marriage, but it does not have any legal binding force.

↓

- They are considered unrelated on the family register thus are unable to receive some rights.

My Opinion (ideals)

- **The legal system**: Same sex marriage should be legally acknowledged both in Thailand and in Japan.
- **The social system**: the "rest room" problems

↓

- The social system which divides people between men or women may be problematic.

My Opinion (realities)

- It is too difficult to change the social system which has continued for a long time.
- Sexual minorities should accept these existing legal and social systems in some cases.

↕

- How friendly ordinary people interact with sexual minority is more important than changing the systems.

One more important thing

○ Some accept sexual minorities without any trouble.

× Others cannot easily interact with them.

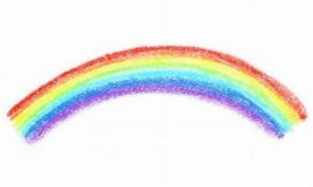
◎So, it's necessary to communicate with others enough and try to understand what other people think.

What I want you to do next

◎I want you to talk about the theme freely.
You don't have to draw a conclusion.

- "We should be considerate of them."
- "What do you think about sexual minorities？"
- "I don't understand sexual minorities."

etc. Anything is OK !!

What should we do in order for many people including sexual minorities to live happy lives？

Thank you for listening!!